月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.35



読み切り漫画
『エア＝レッテンにて』
Na

jdkバンド
ボーカル・コテカナの
コテ放題♥

ファルコムjdk バンド ドラマー・オカジの
人生半キャラずらし

ティオの
ファルコムラジオ
めんどくさいです…
でもがんばりますの
舞台裏

ファルコムニュース

新連載
主役は特務支援課一の人気者！
英雄伝説 零の軌跡
ツァイトと子供たちの軌跡
冬木冬樹

カオスすぎる音楽祭！
みんな集まれ！
ファルコム学園

啄木鳥しんき
イラストメッセージ

『零えぼ』キャラアニ限定版同梱
ドラマ CD『みにどらまざんまい』シナリオ掲載第３弾
「ドラマ版・偽ブランド業者の摘発」
「待ち合わせはベルガード門で」

いよいよ放送直前！
アニメ『みんな集まれ！ ファルコム学園』最新情報！
新久保だいすけインタビュー＆
キャストコメントが到着!!



緊急速報!! 『閃の軌跡』続編ほか
日本ファルコムの最新作情報を一挙大公開!!



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



巻頭特集

『閃の軌跡』の続編ほか期待の新作が続々発表!!

先日行われた日本ファルコムの株主総会で、早くも『閃の軌跡』の続編が発表された。また、それ以外にも注目すべき新情報が到着したので、今回は巻頭特集としてそれらの情報をたっぷりと紹介していくぞ！

情報その1
『英雄伝説 閃の軌跡』続編

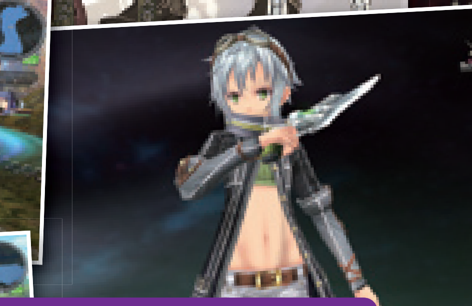
エレボニア帝国を舞台とした『軌跡』シリーズ最新作『英雄伝説 閃の軌跡』。その続編が来年に発売されることが発表された。あわせて、リィンたちⅦ組メンバーの新たな衣装や、最新のスクリーンショットも公開されたので、それらの資料を徹底解剖していくぞ。

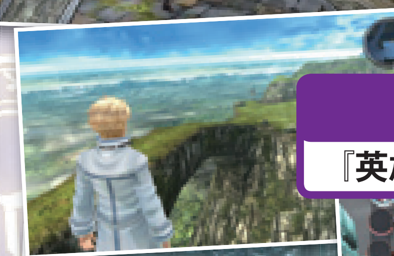
■ 製本情報

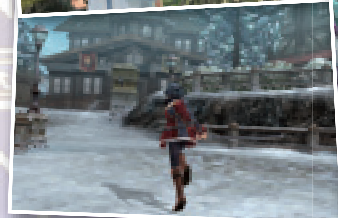
タイトル	：	未定
発売日	：	2014年予定
価格	：	未定
対応機種	：	PlayStation®3／PlayStation®Vita













Ⅶ組メンバーの新コスチューム姿や最新のスクリーンショットを入手!!

衝撃の結末で幕を閉じた『閃の軌跡』。続編ではⅦ組一同は新たなコスチュームで物語をスタートすることになる。その新たなる姿をじっくり見てみよう。



リィン・シュバルツァー

灰の騎神・ヴァリマールに乗り、ひとり難を逃れたリィン。『閃』のエンディングで雪の降る地方へと向かったことが分かるように、厚手のコートを身にまとっている。

アリサ・ラインフォルト

ボディラインにフィットした機能的なデザインの衣装に、長めのアームスリーブと、かなりスポーティーな出で立ち。得物である導力弓もうまく扱えそうだ。

エリオット・クレイグ

いかにも芸術家といった私服だった『閃』とは違い、アクティブなイメージの衣装となったエリオット。彼もまたリィンと同様、寒冷地で着るような厚めの衣装になっている。

ラウラ・アルゼイド

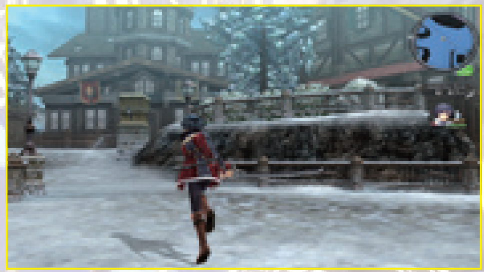
青を基調とした、いかにも『騎士』といった凛々しい佇まいを見せるラウラ。父・アルゼイド子爵も青のコートを羽織っていたのを見るに、アルゼイド家の正装か……？

マキアス・レーグニッツ

マキアスは士官学院生から大学生のイメージへと変身を遂げたようなどこか都会的なコーディネイト。ジャケットの前面が大きなアクセントになっている。



雪の積もる街に佇むリィン。『閃』の同梱ドラマCDにも雪が降る街が紹介されていたが、関係はあるのだろうか？



一枚目の写真と同じであろう街を駆けるリィン。街の中で武器を構えているが、これは開発中の画面だからなのか、それとも？



ヴァリマールにかなり似た機体と、その前に立つリィンの義妹・エリゼ。この構図の意味するところとは……



『閃』でもリィンたちをサポートした遊撃士トヴァル。右上のマップを見るに、プレイヤーが操作しているように見える



エマ・ミルスティン
エマのコスチュームは学院祭のステージ衣装にも負けない大胆なものに。手袋についた宝石など、随所に魔術的な印象を漂わせる意匠が施されている。

ユーシス・アルバレア
実家であるアルバレア家が治める翡翠の公都バリアハートをイメージさせるような翠色のコートを羽織るユーシス。さりげない着崩し方がニクい！

フィー・クラウゼル
腹部を大胆に露出した衣装にゴーグルと、一番の変身を遂げたフィー。猟兵団「赤い星座」のシャーリィを彷彿とさせる意匠を見るに、猟兵の世界ではわりとスタンダードなのかも？

ガイウス・ウォーゼル
ガイウスは遊牧騎馬民族であるノルドの民の人間なだけに、現代でいうと東欧から中東あたりの騎馬民族をイメージさせるような衣装となっている。

ミリアム・オライオン
上司であるオズボーンが狙撃された後の動きが気になるミリアム。アーガイル柄のハイソックスに水兵帽のような帽子と、彼女らしい活動的で自由奔放なスタイルだ。



新たな衣装でフィールドアクションを見せるラウラ。上段から大きく切り落とした『閃』から、横薙ぎに変わっている



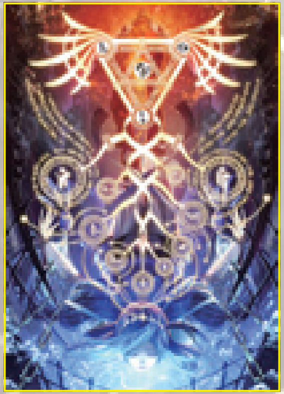
どこかの基地のように見える施設を遠くから眺めるフィー。これからここに侵入しようとしているようにも見える

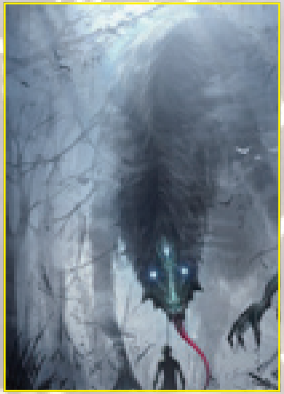


戦闘中にクラフトを使った際などで見られるアップのシーン。ゲーム中のデザインを見ても、彼女の衣装の大胆さが窺える



こちらは戦闘中のラウラ。正眼の構えではなく八相の構えに変わったのだろうか？　ちなみにこの敵は『空の軌跡SC』にも登場しているぞ。また、彼女が戦っているフィールドにも注目したい







『閃』続編のほかにも新作タイトルを開発中

株主総会では待望の『閃』の続編はもちろんのこと、それ以外にも2本、新作を開発中というアナウンスがされた。このページではその新作について紹介していきたい。

情報その2
超大型タイトル（タイトルほか不明）

『超大型タイトル』として紹介された5枚のイメージボード。その中には魔法陣と融合するように描かれた神秘的な女性。霧の中から出現する巨大な怪物や、山にも劣らぬ大きさを誇る怪鳥（？）に相対する剣士などが描かれている。その他の2枚のイメージボードを見ても、いろいろな地域を舞台とするタイトルのようだ。続報に期待したい。





情報その3
ソーシャルゲーム（タイトルほか不明）



コンシューマーゲームで人気タイトルをリリースしている日本ファルコムだが、ソーシャルゲームも現在開発中のようだ。開発画面には、ヨシュアほか「軌跡」シリーズのキャラクターがパーティーを組んで、魔獣を相手にアクションを繰り広げている姿が。こちらもまだここまでしか情報が出てきていないので、続報を待て。





アニメ放送開始直前大特集!!

ファンお待ちかねの年明けのTV放送に向けて、今月も最新情報をたっぷりと公開！　気になる場面カットとキャストの皆様からのメッセージ、著者・新久保だいすけ先生のインタビューまで盛りだくさんでお届けするぞ！　これを読めば『ファルコム学園』の予習復習は完ペキ!?





コミックの雰囲気を完全再現した学園の校舎がお目見え！　ここでファルコムキャラクター達の爆笑の日々が繰り広げられるのだ







■スタッフ

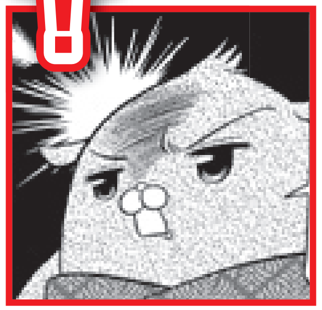
原案：日本ファルコム株式会社
原作：新久保だいすけ
製作：株式会社キャラアニ、株式会社ダックスプロダクション
脚本：山下憲一
監督：ぴっぷや
キャラクターデザイン・作画監督：青葉みずき

2014年1月5日放送開始
毎週日曜日22:27 ～ 22:30　TOKYOMX・サンテレビ

公式サイト ▶ http://www.fal-gaku.com/

豪華キャストコメントが到着！





ラッピィ役 ▶ 進藤尚美さん

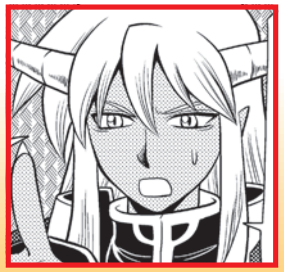
Q1：収録を終えた感想をお願いします。

進藤：進藤：最初このお仕事をいただいた時に別の作品の別のキャラがくるかと思っていたんですよ。当然あのキャラかな？　と思って見てみたら「ラッピィ」と！　記憶を掘り起こして大変な思いで演じました。皆さん3分が短いとおっしゃっていますが､私にはとても長い3分でしたね（笑）

Q2：アニメを楽しみにお待ちいただいている皆さんへメッセージをお願い致します。

進藤：ファルコム学園というくくりで今までのファルコムキャラクターがたくさん登場するアニメなので、私自身もとても楽しみです。皆様もお気に入りのキャラクターがいつ登場するんだろうって楽しみにされていると思います。でも、再度お断りをしますがこれは「ファルコム学園」です！（笑）　テンションあげあげでエネルギッシュに3分間を作り上げていきたいと思いますので皆様もこの作品を心の支えに楽しんで、応援していただければうれしいです。

ダルク・ファクト役 ▶ 興津和幸さん



Q1：収録を終えた感想をお願いします。

興津:短い時間でしたがハイテンションで駆け抜けたので楽しい収録でした。

Q2：アニメを楽しみにお待ちいただいている皆さんへメッセージをお願い致します。

興津：まさか自分がダルク・ファクト役を演じることになるとは夢にも思っていなかったので、びっくりしております。見事、英雄たちを正しき道に導けるようがんばります！！

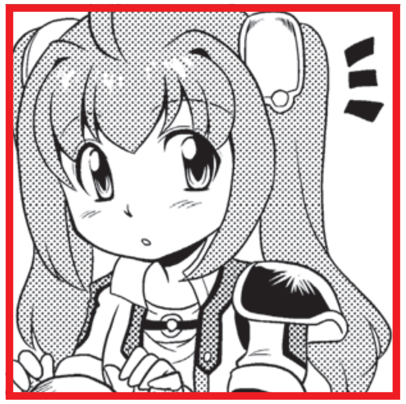
アドルクリスティン役 ▶ 梶裕貴さん



Q1：収録を終えた感想をお願いします。
梶：一度ゲームで演じさせていただいて以来でしたので、今回アニメのほうも僕がやらせていただけるとはと、僕自身驚きました。…とはいえ、だいぶテンションが違う作品だったので、どこまでアドルなのかっていうのは若干疑問ですが(笑)。「いい意味で開き直って別物として考えてください」と言われたので、楽しんで大事に演じさせていただければなと思いました。

Q2：アニメを楽しみに待っているみなさんへメッセージをお願いします。
梶：ゲーム本編とは著しくキャラクター設定が異なっております！（笑）　それがとても良いテンポでアニメ化されている作品になっています。僕自身も楽しんで演じさせていただきましたので、皆様も最後までまばたきしないように、毎週ご覧いただければうれしいです。

エステル・ブライト役 ▶ 神田朱未さん



Q1：収録を終えた感想をお願いします。
神田：３分であっという間だなあと思いながら収録したんですけど、その中でツボにはまる場面もいくつかあってすごくおもしろいなと思いました。

Q2：アニメを楽しみに待っているみなさんへメッセージをお願いします。
神田：ヨシュアが…！　っていう気分なんですけど新年から皆様に目いっぱい笑いをお届けできると思いますので、是非楽しんでください！

ヨシュア・ブライト役 ▶ 斎賀みつきさん



Q1：収録を終えた感想をお願いします。
斎賀：また新しい扉を開いてしまったなあと言うぐらいぶっ飛んだ内容にはなっていますが、ファルコム作品でおなじみのキャラクターたちがTVアニメとして動いているので、すごいなぁと思いつつ、楽しんで収録をやらせていただきました。

Q2：アニメを楽しみに待っているみなさんへメッセージをお願いします。
斎賀：来年は「軌跡」シリーズ10周年ということで、まずはおめでとうございます。関わらせていただいてそんなにも年数が経ったのかと驚きつつ、ヨシュアとそれだけの間ともに歩ませていただけているのですごくうれしいなと思っております。このアニメはかなりおもしろいことになっているので、応援の程、ぜひよろしくお願いします。

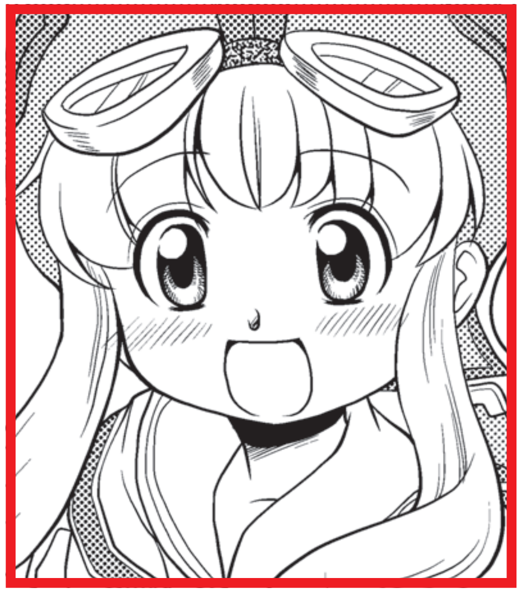
ティオ・プラトー役 ▶ 水橋かおりさん



Q1：収録を終えた感想をお願いします。
水橋：アニメーションで動くファルコムキャラクターたちがとてもいきいきしていて面白かったです！

Q2：アニメを楽しみにお待ちいただいている皆さんへメッセージをお願い致します。
水橋：ファルコム愛の詰まった作品に仕上げていきたいと思っていますのでどうぞよろしくお願いいたします。

ティータ・ラッセル役 ▶ 今野宏美さん



Q1：収録を終えた感想をお願いします。
今野：ファルコム学園のアニメ化ということでとても楽しみにしていて、キャラクターが動く姿を見ながら皆で一緒に収録できたのがうれしかったです！

Q2：アニメを楽しみに待っているみなさんへメッセージをお願いします。
今野：今までのゲームの世界と全く違う形なので新しいファルコムの１年が始まるような気がしています。改めて色んなキャラを再認識してもらえるとも思いますし、様々なファルコム作品に触れるきっかけになるアニメだとも思ってます。是非楽しんでいただければうれしいです！

アガット・クロスナー役 ▶ 近藤孝行さん



Q1：収録を終えた感想をお願いします。
近藤：今回は本当にアッと言う間で、登場シーンも少しだけだったのでもっとたくさんのキャラクターと絡んでみたかったですね！

Q2：アニメを楽しみに待っているみなさんへメッセージをお願いします。
近藤：初めて声のお仕事で関わらせていただいてからもう10年近くになりますが、ついにアニメとなりました。出番が増えればいいなあと思っております。楽しみにしていてください！

レン役 ▶ 西原久美子さん



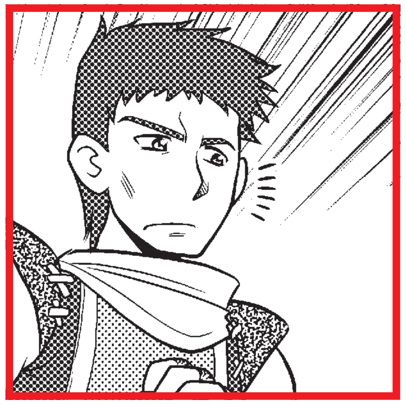
Q1：収録を終えた感想をお願いします。

西原：いままで関わっていない、全然知らないキャラクターの皆さんとの出会いなのでとても新鮮でした。ラッピィ先生を存知あげなくてごめんなさい！（笑）

Q2：アニメを楽しみに待っているみなさんへメッセージをお願いします。

西原：ついにTVアニメ化、素晴らしいです！ うれしい気持ちで一杯です。新たなファルコムの世界へようこそ、という感じですね。皆様も楽しみだと思いますが、私もとても楽しみです！

ドギ役 ▶ 馬場圭介さん



Q1：収録を終えた感想をお願いします。

馬場：久し振りにドギを演じました！ でも「こんなキャラクターだっけ…？」と（笑）。何かのために壁を壊すんじゃなくて、壁を壊すために壁を壊しました。また壁を壊しにこられたらいいなと思います。

Q2：アニメを楽しみに待っているみなさんへメッセージをお願いします。

馬場：本当に濃い３分間を楽しんでいただけると思います。誰も予想のできないキャラクター展開を僕も楽しみにしているので、皆様も楽しみに待っていてください。

ガッシュ役 ▶ 佐藤拓也さん



Q1：収録を終えた感想をお願いします。

佐藤：ひさびさにガッシュを演じさせていただける機会が、しかもアニメでいただけたということで、非常にうれしく思っています。原作以上にみんなテンションが高くて弾けているので、楽しみながら収録をさせていただきました。

Q2：アニメを楽しみに待っているみなさんへメッセージをお願いします。

佐藤：本当に長い歴史のあるファルコムさんの数々のタイトルからツボの押さえたキャラクターが登場しています。ファルコムファンのみなさんはニヤニヤしっぱなしのお話になっていると思います。また、この作品ではじめてファルコム作品に触れて興味を持っていただいた方には、ぜひ原作のゲームの方もプレイしていただければと思っています。

新久保だいすけ先生

『みんな集まれ！ファルコム学園』アニメ化インタビュー

■あらためて、アニメ化おめでとうございます！

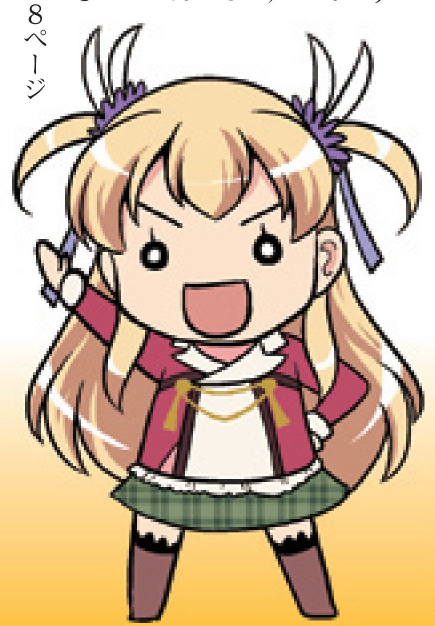
新久保：やりましたというかやってしまいましたね！　まさかこんな事になるとは思ってもいませんでした。いろんな歯車がうまい具合にハマった結果ですね。元々『ファルコム学園』は数あるファルコム作品を使わせていただき、すみっこでこっそりと好きなようにやらせていただく、という立ち位置だと思っていたので、正直えらいことになったなと。でも、創刊時から掲載していただけているということはとてもありがたいことです。連載もマガジンもまるまる3年ですね！

■ご自分の作品がアニメになるという気持ちはいかがですか？

新久保：今日アフレコ収録を見学したのですが、いまだにドッキリなんじゃないかと思っています。放送の日にテレビの前に座って待っていたら、違う番組がはじまったり、「ドッキリ大成功！」っていう映像が出たりして（笑）。最初はＷｅｂかな、ＯＶＡかなと思っていたんですが、いただいた情報に放送日が書いてあって「えっ?」て。大阪でのｊｄｋライブの日に「テレビですよ」と教えていただいた時は本気で担がれてるのかと思いました。

■アニメ化の話はだいぶ前から出ていたんですけどね。媒体の選定や商品の形態など水面下で色々と動いてはいたんですよ。

新久保：ファルコムさんは本当に決めたら早いですからね〜！　でもゲームの音声ですでに決定している声優さんも多いですし、その点は有利なのかもですね。８ページの漫画を3分ほどのアニメにどう落とし込むのかな、と思っていたんですけど、昨日今日と収録で見せていただいたもので「なるほど、これはイケる！」と感じました。むしろ３分が正解なのかもしれないです。基本はかけあいで、説明もなく被せ気味にグイグイ展開していきます（笑）。漫画の話になりますけど、置いてきぼりはある程度仕方ない、という感じで始めたものですが一応配慮はしていますね。「イース」や「軌跡」など今のファンがよく知っている作品をベースにしつつ僕が掘り起こしたい昔の作品を入れていっています。今のファンにも興味を持ってほしいなと。それができるのがファルコム作品の歴史のすごさっていうことでもありますね。



■収録のほうは実際お聴きになられ

収録で見せていただいたもので「なるほど、これはイケる！」と感じました。



ていかがでしたか？

新久保：僕はアニメに関しては本当に素人なので、どういうものなのかすらわからない状態で参加させていただいたんです。それがもう、月並みなんですが絵に命が入ったというか……「アニメになっていく！」という子供のような感想が出てきましたね。自分だけのものから、いろんな人達が力を貸してくれたひとつの作品になっていくという過程、生まれる瞬間を見ることができました。スゴイ所に来てしまったと思いましたよ（笑）。効果音も声優さんの声も入っていない映像や文字だけの台本だけだと、正直どうなるのかわからないところもあったんです。でもアフレコ現場では、「声で演技すること」が意味を持ってくる瞬間がわかるのが感動的でした。アドルの「美少女――！」っていう叫びは声が入ることで意味が全然違ってきますからね（笑）。監督も音響監督もすごくこだわっていただいて、「こう言ったほうがいいかな?」って僕が言う前に全部修正していってくださっているんです。心の底から「お願いします！」とお任せできる状態でした。いいものにしようという覚悟が伝わってきたので今回は本当に来てよかったと思います。

■キャストの方々のイメージなどはどうでしたか？

新久保：ひとつの役を長い間担当されておられる方もいらっしゃいますし、それぞれのキャラクターへの思い入れやイメージとのすり合わせを目の当たりにできたのは貴重な体験でした。漫画版キャラクター的には申し訳ない気分で一杯だったんですけどね（笑）。元々のイメージと合わせて飲み込んだ上で、自分のものとして演じていただいたのがうれしかったです。プロだなぁと。何か言うことが野暮と思えるくらい僕が言うことは何もないです！　作り上げられる物の凄味を感じました。何度でも見たいです。毎回呼んでいただいて机があったらここで仕事しますので！



■ファンの皆様の反響はいかがですか？

新久保：たくさん反響や応援をいただいていますが中にはやっぱりちょっとした批判のような意見もあります。でも、それこそファンの会話だと思っています。僕もいちファルコムファンですから。そこからじゃないと何も生まれませんし、歴史のあるメーカーなのでそういった声が出てくるのは当然ですから。今後も新旧色んなキャラを出して行きたいですから……それこそみんな集まるまでやりたいですね！（笑）最終巻には表紙にファルコムキャラが全員みっちり詰まってたり。メインキャラだけじゃなくて脇にしか出てこないキャラクターも今後どんどん出していきたいです。



■収録を経て、今後の漫画にフィードバックできそうなネタなどはありましたか？

新久保：こうして展開が広がるといろいろとアイディアも広がりますね。キャラクターひとつとってみても、元のキャラからだいぶ変化しているのと、そうでもないのがいるんですけど、その時々の話の都合に合わせて設定してたりするんです。まぁ、だいたいは僕らファンの中での世間話的なネタからきているものも多いですね。公式設定ではないけれど、一般認識に近い「あるある」な設定みたいな感じです。公式は一度も「ロリコンダイブ」って言ってないですし！（笑）でも、こんなことになっているアガットやヨシュアたちを見て皆さんがどんな顔をするのか楽しみです。これをきっかけに漫画だけでなくゲームもプレイしていただければうれしいですね。とにかく毎回違うキャラクターがどんどん出てきますし、今回でガガーブ編が終わって次は『閃の軌跡』に行こうかと思っているんですけど、どうやって崩していこうかと。「アリサちゃんの軌跡講座」である程度描いてしまったので、他のキャラクターをどうしようか迷っています。いい意味で「これはひどい」ってなるようにしたいですね。ちなみに「これはアリサじゃない」って社長からありがたいお墨付きももらいましたので（笑）。癖のない真っ直ぐな人のほうがイジリがいがあるので、ガイウスあたりがいいかもしれないです。『閃』のメンバーが描けるのでようやく本当の意味で学園モノになってくる……かも？　できる限りがんばっていきたいですね！

■最後に読者のみなさんにメッセージをお願いします！

新久保：皆様のおかげでTVアニメ化という晴れ舞台を与えていただいて心から感謝しております！　漫画のほうも「みんな集まれ！」という名前のとおり、脇役キャラにいたるまでファルコムキャラ全員集合を目指して頑張りますので、アニメ共々これからも応援よろしくお願いいたします!!



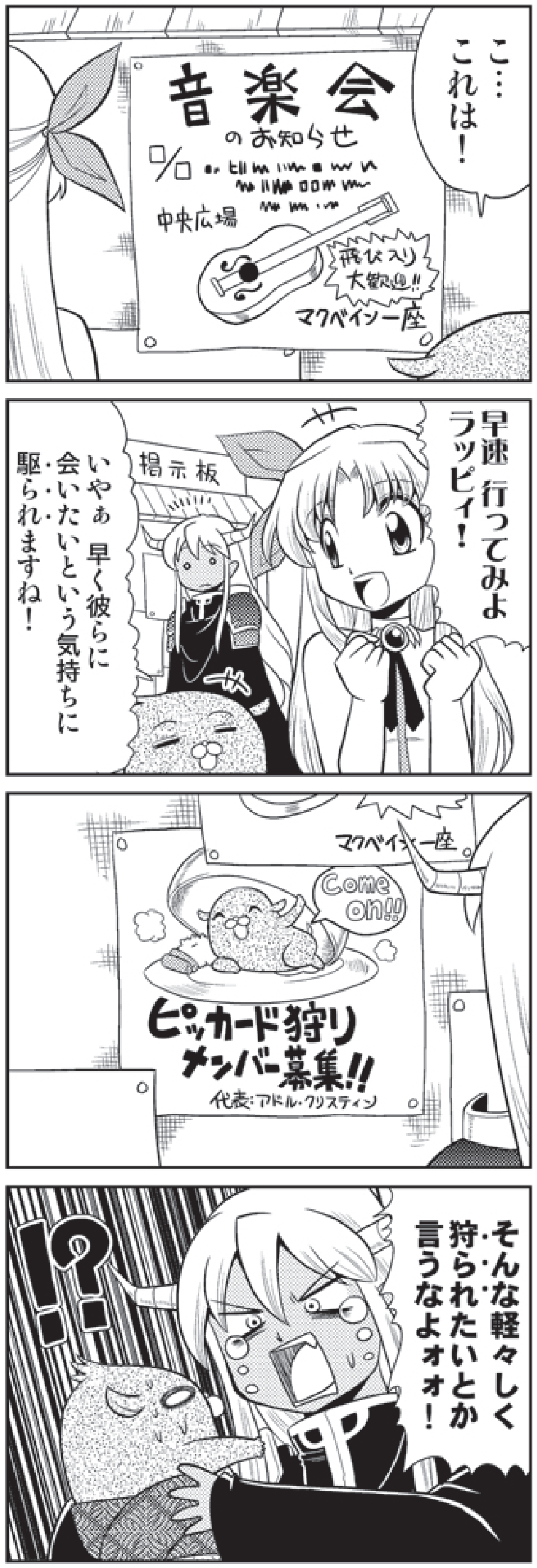
ようやく本当の意味で学園モノになってくる……かも？



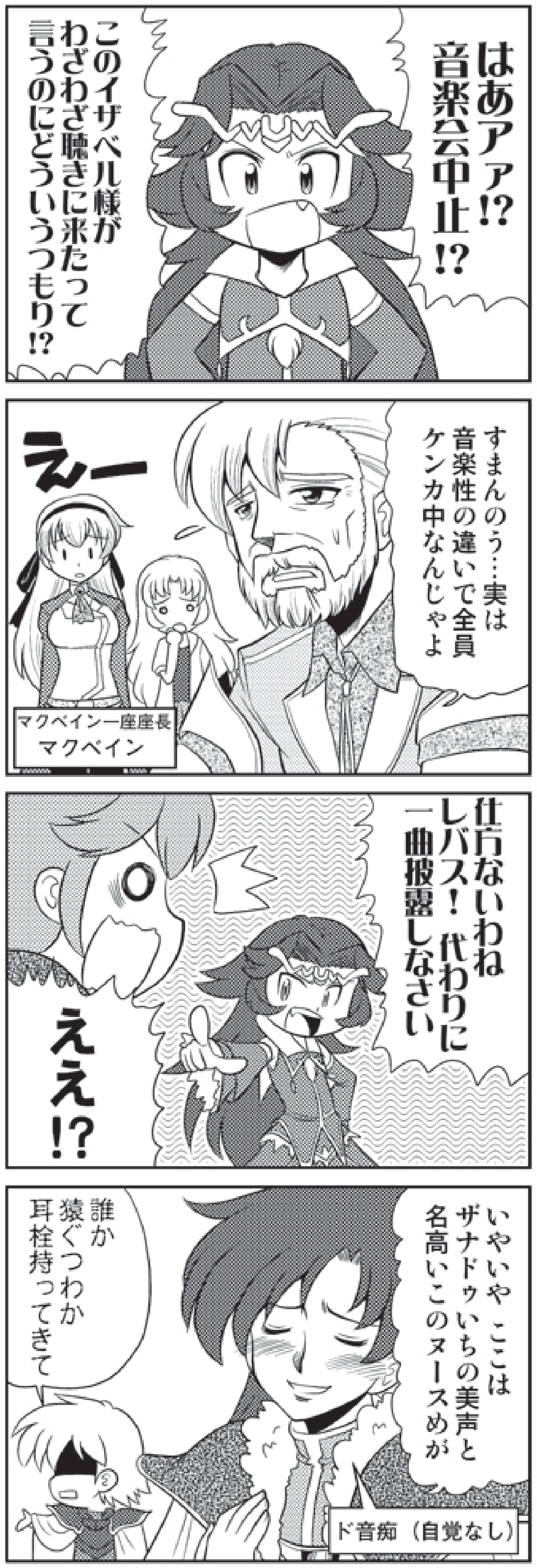
みんな集まれ！ファルコム学園

新久保だいすけ

かりごろかられごろ



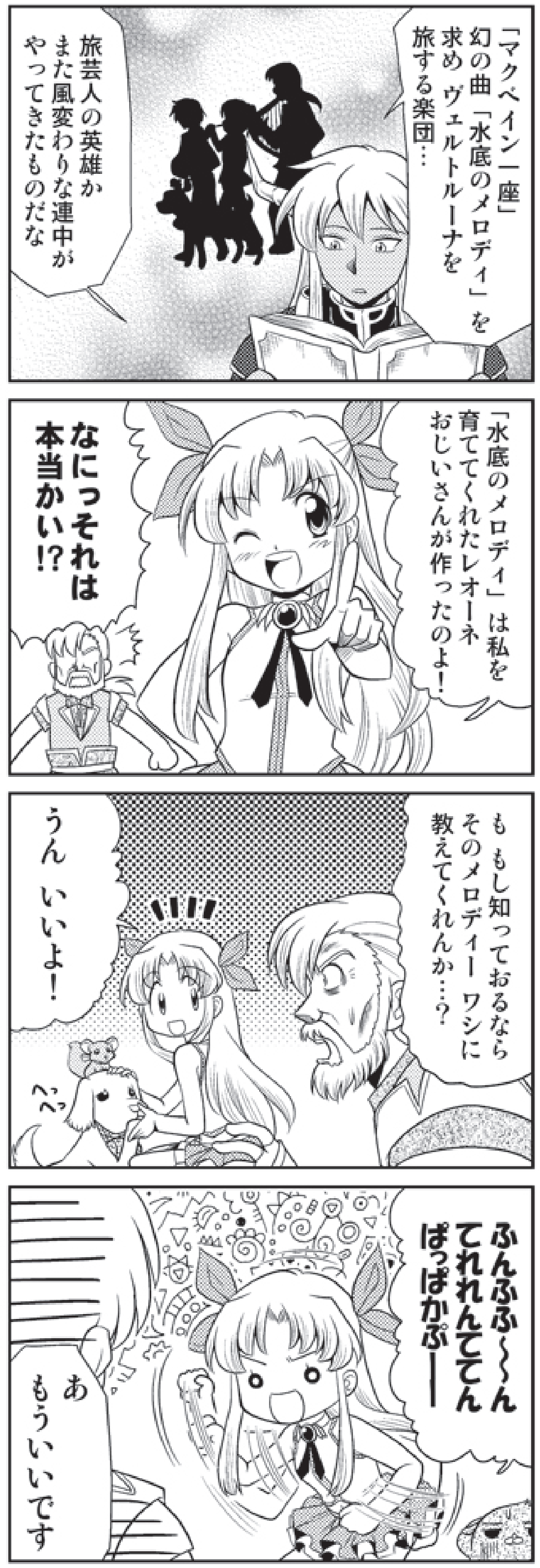
中止の原因



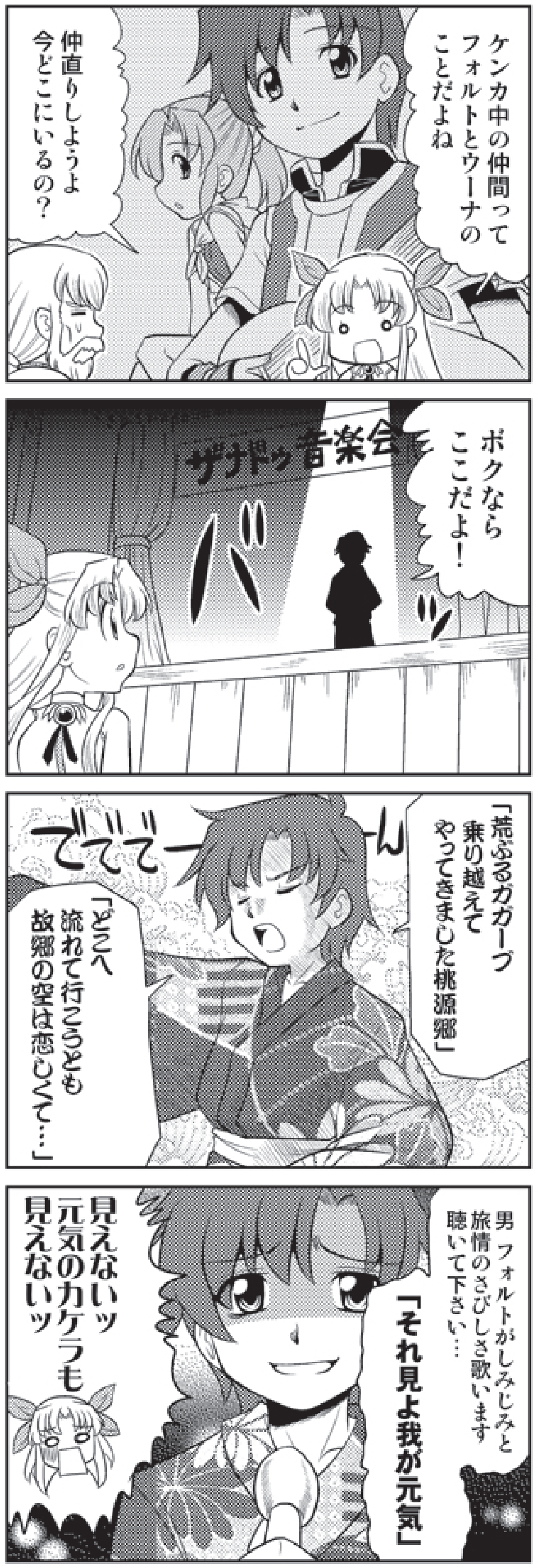
ラップじいさんとMCバトル



水底のメロディ



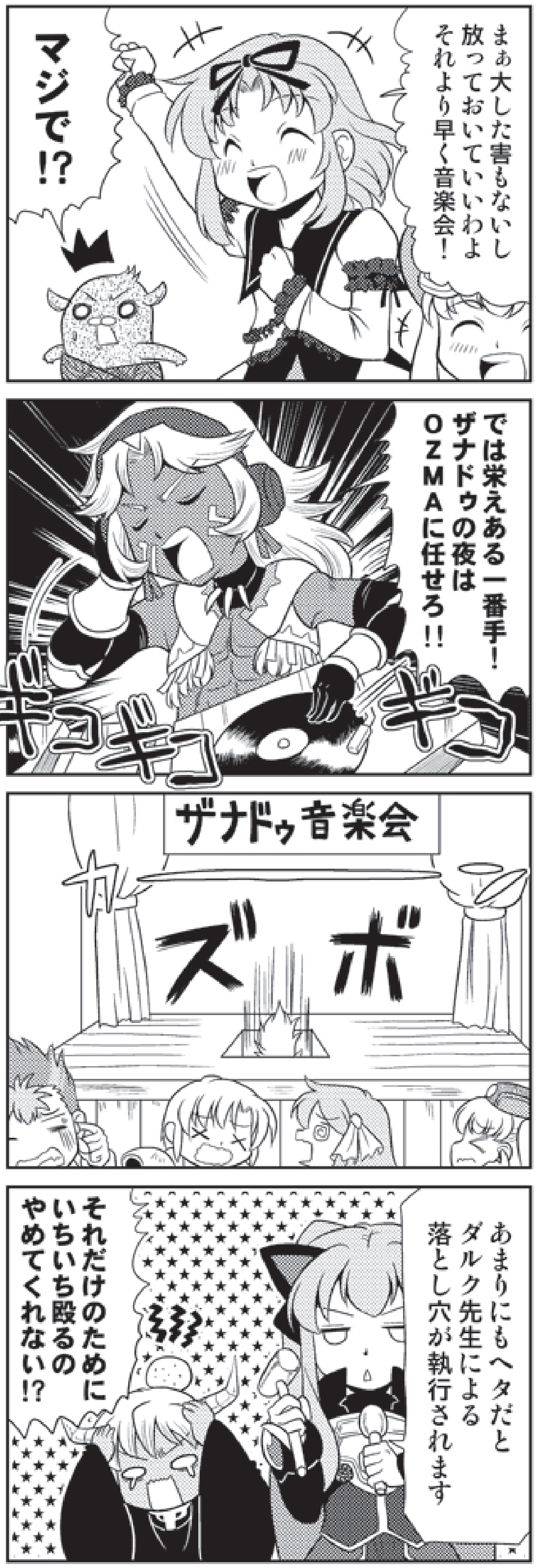
フォルトの音楽



人の因果



罰ゲーム



↑攻撃されると床に穴が開く体質

音もダメらしい



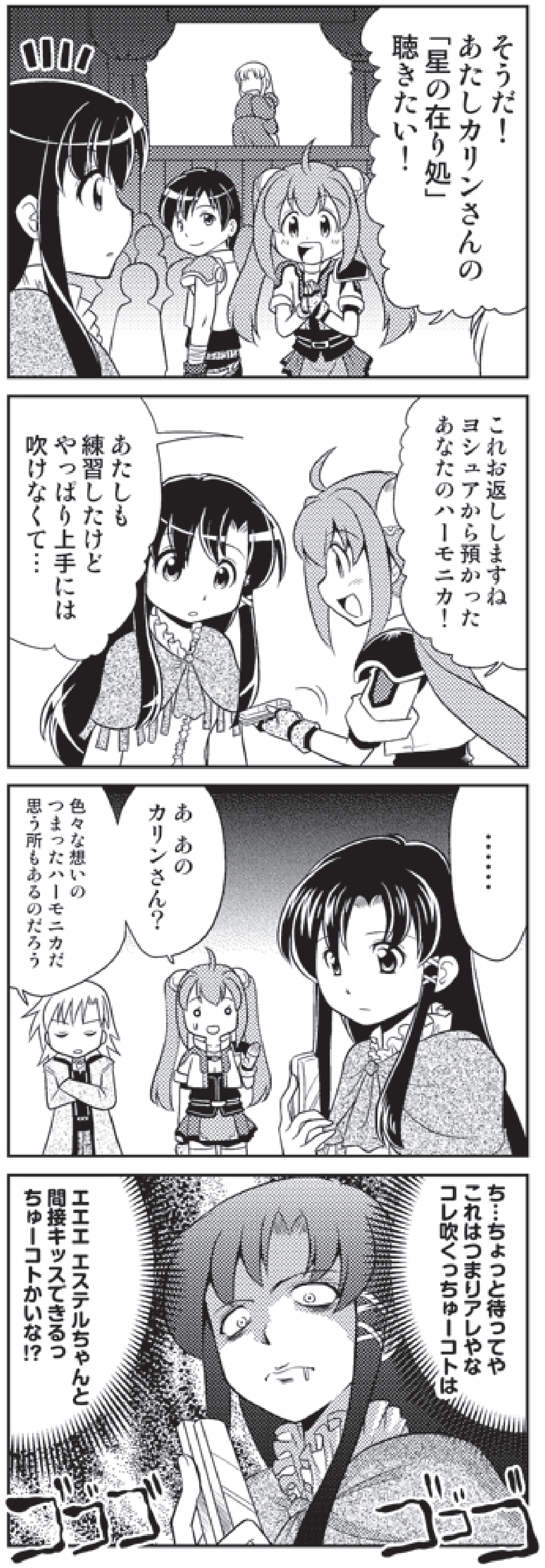
裏切りの友



ネタつぶし



理性の在り処



親友のあつかい



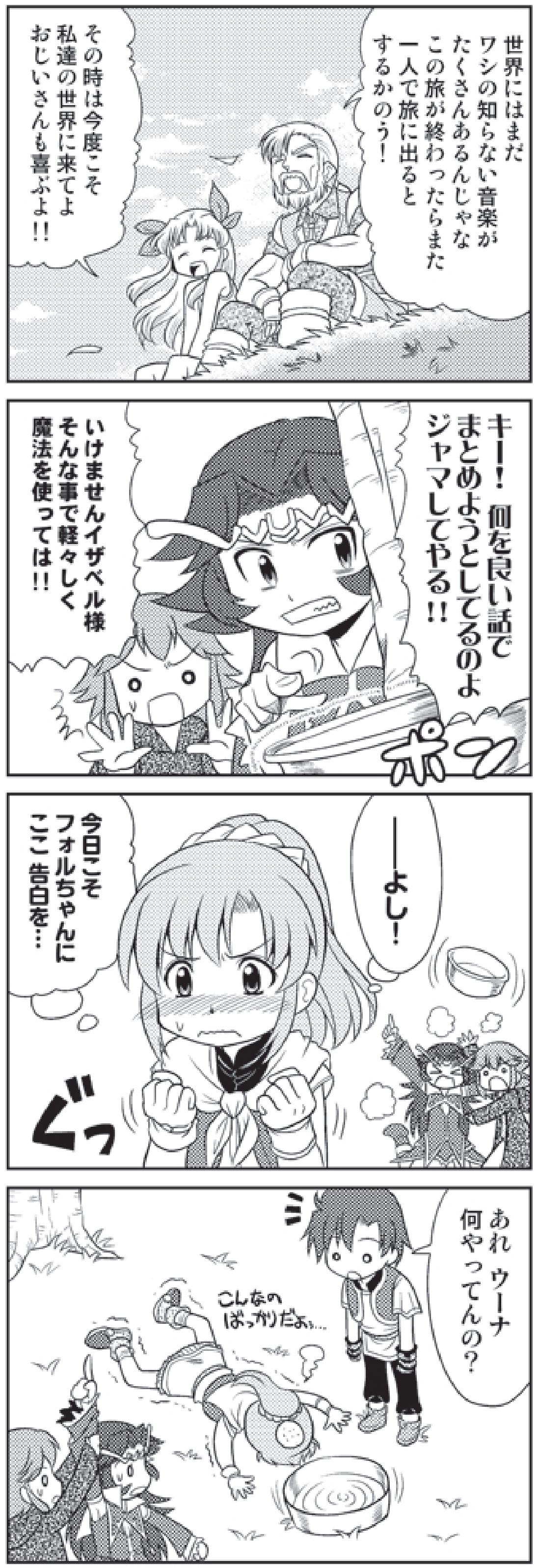
ビッグウェーブ



最後の切り札

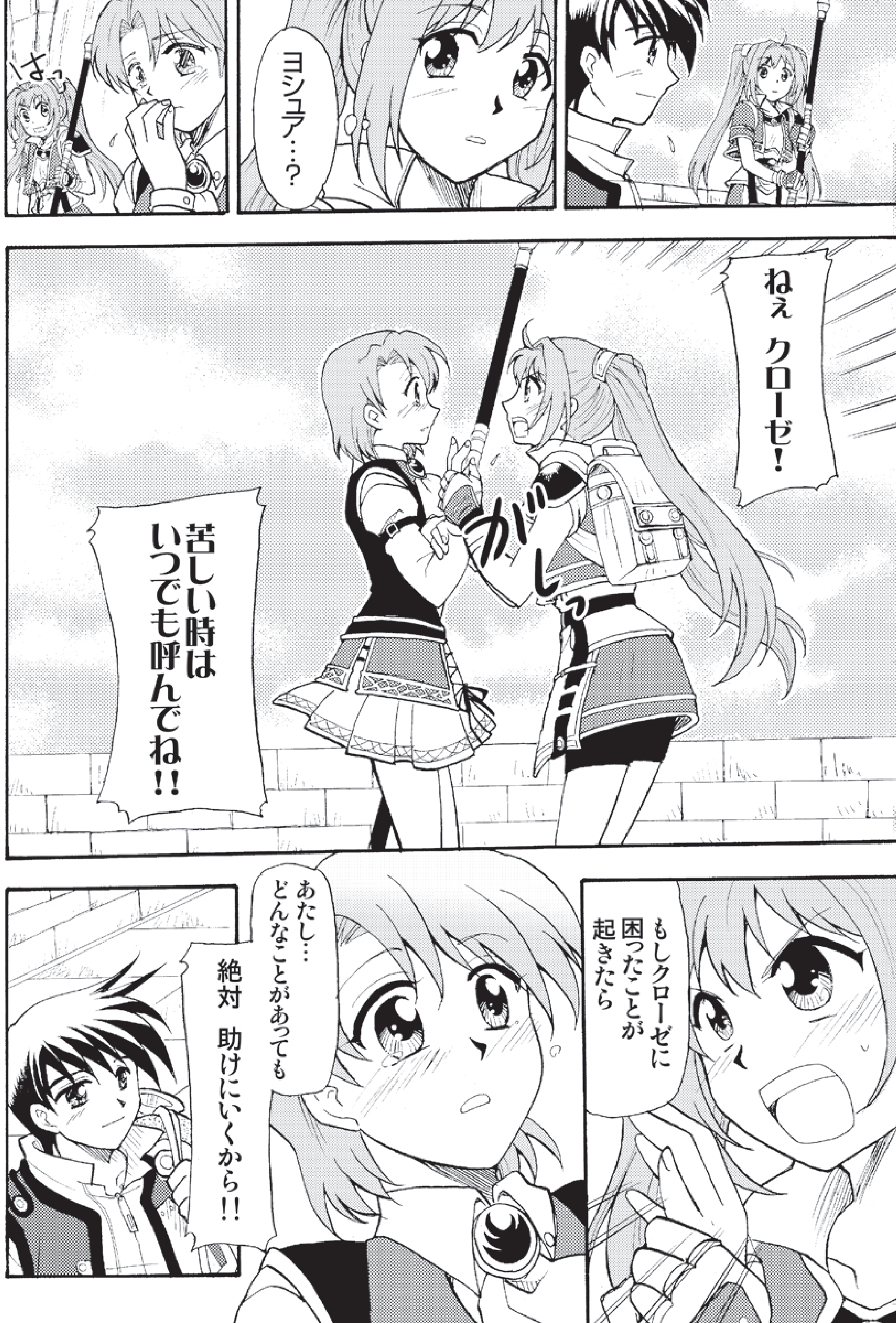


ウーナの日常

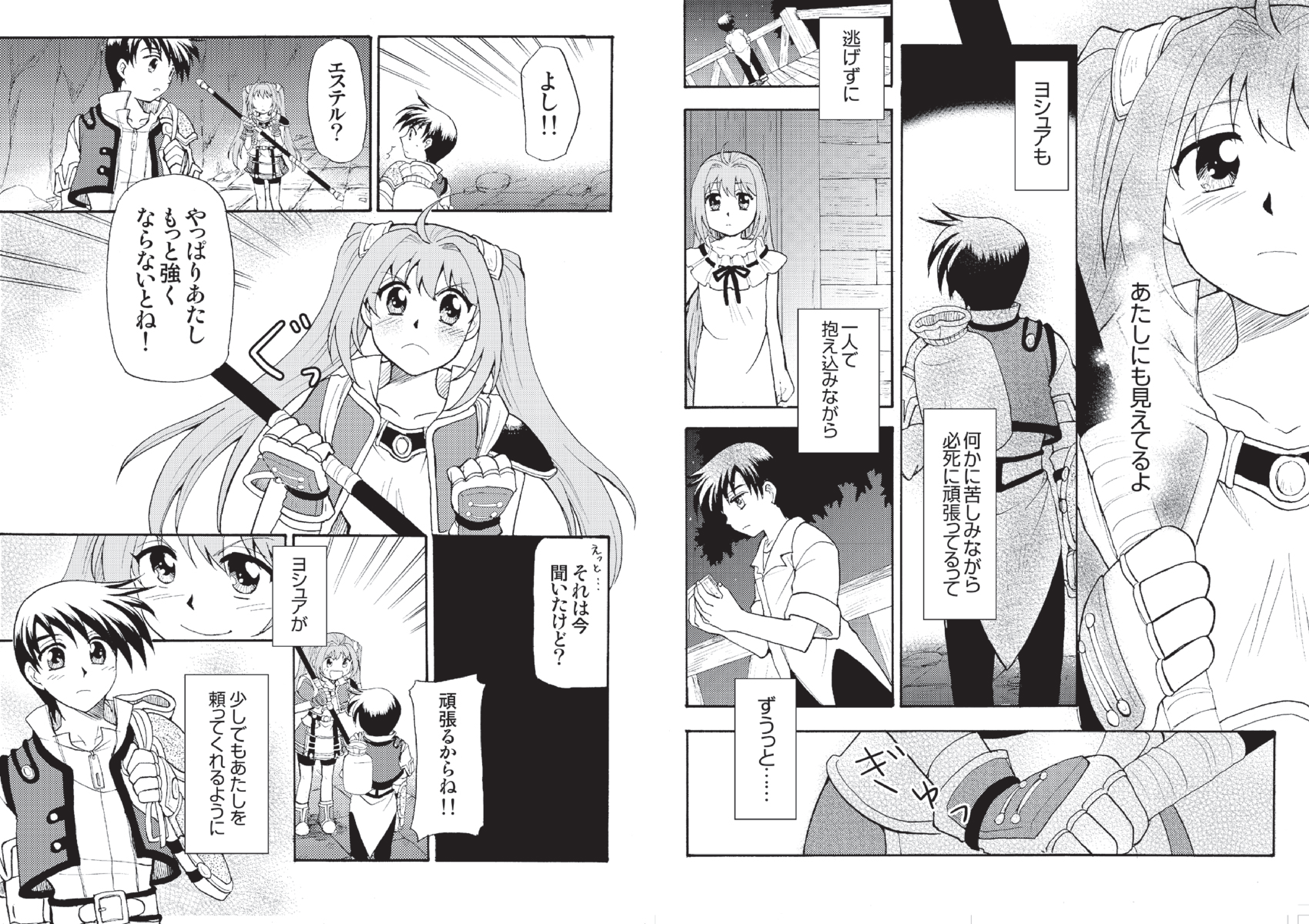



逃げてるだけなんです
私は
逃げてしまいたくなるのは
それが自分にとって大切なことだってわかっているからだよね
エア=レッテンにて
Na
自分の立場から
君は…まだそこから逃げてしまわずに
必死に向き合おうと踏ん張っている
そんな風に
僕には見えるよ

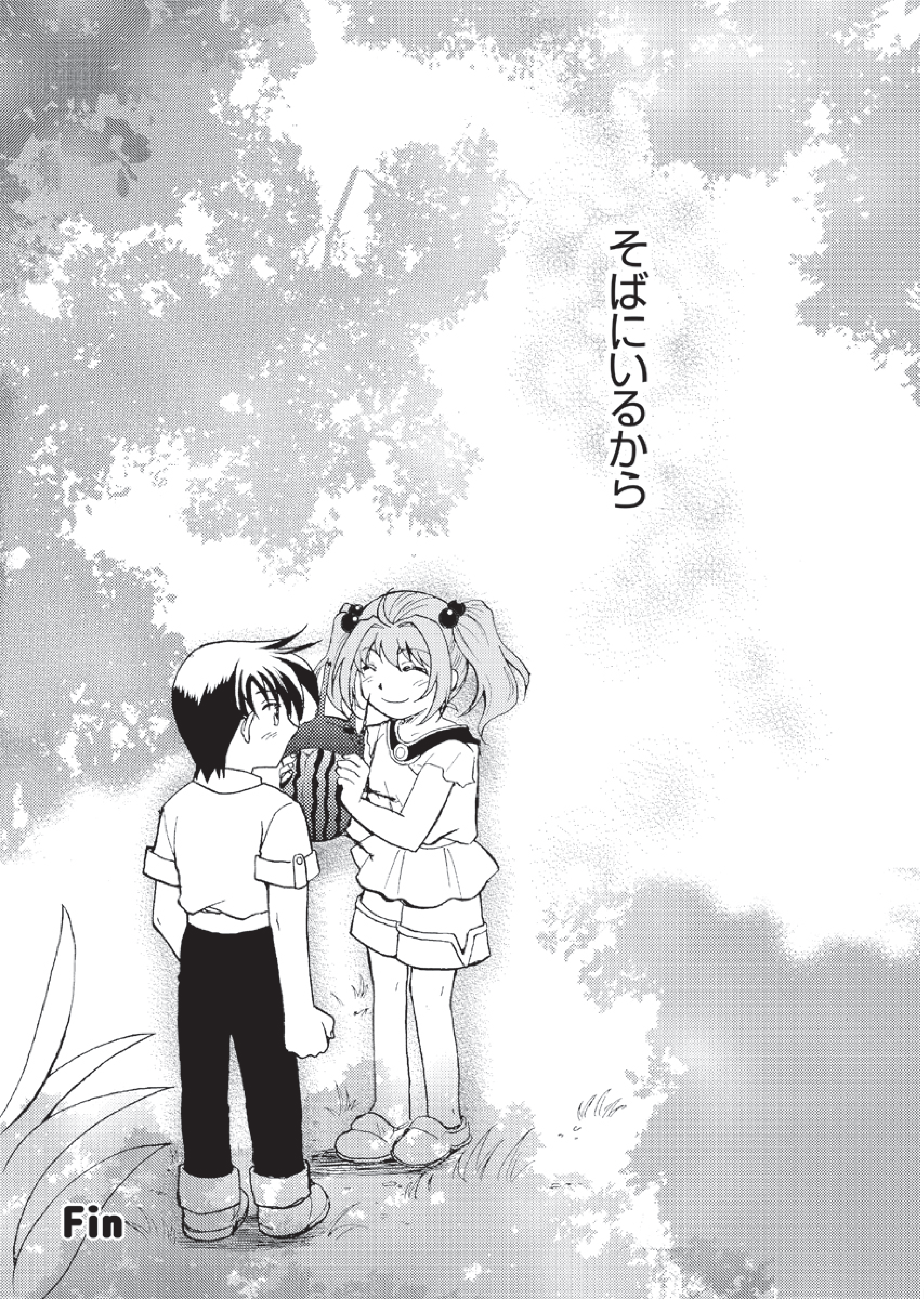

目指せ！ファルコム一番星!!
FB ファルコムBOOKS
日本ファルコムの人気キャラクター達が繰り広げるオールスターギャグ四コマの暴走は止まらない！　まさかのアニメ化でますますヒートアップ(？)するファルコム学園に君も入学してみないか!?
アニメ化御礼！
みんな集まれ！
ファルコム学園①②
著者：新久保だいすけ
価格：893円(税込)
ISBN:978-489610-245-1
好評発売中!!
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


はっ
ヨシュア…?
ねぇ クローゼ!
がしっ
苦しい時はいつでも呼んでね!!
もしクローゼに困ったことが起きたら
あたし…どんなことがあっても
絶対 助けにいくから!!


…はい!
あたし
強くならないとね!
前に時計塔でヨシュアに言ったこともだけど
いつでもクローゼを助けに行けるように
その為にもめいっぱい頑張らなきゃ!
そうだね
ねぇ ヨシュア


ヨシュアも
逃げずに
一人で抱え込みながら
ずうっと……
何かに苦しみながら必死に頑張ってるって
あたしにも見えてるよ
ぎゅっ
よし!!
エステル？
やっぱりあたしもっと強くならないとね！
ぐっ
ヨシュアが
少しでもあたしを頼ってくれるように
頑張るからね!!
えっと…
それは今聞いたけど？


抱えた何かを
話してくれるまで
それまで


そばにいるから
Fin


FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ　脚本：田沢大典
『空の軌跡』が始まる――
もうひとつの
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの「空の軌跡」の物語が始まる！
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


啄木鳥しんき
ファルコム大好き！
『閃の軌跡』主にPS3版、時々Vita版。
人物の頭身表現が上がったことで、自分の
好きな「軌跡」がどう変わってしまうのか、
少し心配していたフシもあったのですが、
見事に杞憂に終わりました。すごかったー！
おもしろかったー！
とにもかくにも続きを楽しみにしています。



英雄伝説零の軌跡
ツァイトと子供たちの軌跡１

▼著：冬木冬樹

特務支援課の食卓で、ロイドは疲れたように息をつく。

慌ただしく時間が過ぎていく。

ここ最近は特務支援課や警察、遊撃士のみならずクロスベルという市そのものが忙しなく一日を過ごしているかのような毎日だ。

ロイドたちはようやく一息ついて、エリィとティオが用意してくれた簡単なパスタとサラダを食べていた。

「そういえば……ロイドさんたちの方は交通整理の手伝い、どうでした？」

「ああ、結構面倒だったかな。違法駐車している導力車を力任せで壁際まで移動させたんだ」

今日はエリィ、ティオとは別の仕事に就いていたために、そんな会話もあった。

とにかく最近は警察関係の仕事が忙しい。

劇団《アルカンシェル》の新作お披露目と、クロスベル創立記念祭がちょうど重なってしまったから例年よりも警察の業務が忙しくなっているのではないか――エリィはそう分析した。

「ま、こっちに回って来るのはもっぱら雑用ばっかだけどなァ」

ランディがそんなこと言って、話題は《クロスベルタイムズ》の掲載記事を経て、その紙面でよく比較される遊撃士――エステルとヨシュアの話に。

たった二人なのに特務支援課に負けず劣らず――というか勝っている――活躍をする二人の話をして、自分たちもまだまだだ、という結論になった。

場の空気が沈みかける。

ロイドは繕うように発言する。

「ま、まあ……俺たちだって十分成長してるさ。この前から、頼りになる助っ人も来てくれていることだし――」

そう言って気付いた。

その助っ人、ツァイトの姿が、どこにもないことに。

「……そういや、ツァイトは？」

「今日は見てないわね……昨日は屋上で一日中、日向ぼっこをしてたみたいだけど」

「魔獣との戦闘になった時に助けてくれるのはいいんだが……いったい普段、何してんだか」

エリィとランディも心当たりがないらしい。

「……彼は誇り高い神狼ですから。わたしたち人間の決めたルールに縛ろうとしても無意味かと……」

唯一ツァイトと意思疎通できているティオもまた、彼の行き先を知らない。

だからこれから語られるのは、特務支援課のメンバーたちが知らない、ツァイトの話。

とある事故がきっかけで結ばれた、子供たちと神狼との奇妙な絆の物語である。

その日、支援課ビル西通り側出口で、ツァイトはひなたぼっこをしていた。

場所にここを選んだ理由は特にない。足の向くまま、気の向くまま、ツァイトは行きたい時に行きたい場所へ行き、やりたいことをする。

そしていざ呼び出されれば力を貸そう。それまではあくまでも特務支援課の若者たちの様子を見守るというスタンスで干渉しすぎないように接するつもりだった。

見守るならば側に貼り付いているべきだという向きもあるかも知れないが、それは違うとツァイトは考える。

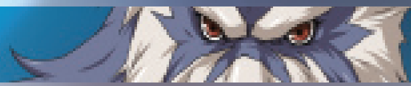
年長者が側にいては若者に甘えが生まれて成長を阻害してしまうかもしれないし、なによりこうまで日差しが心地よいのだから、ひなたぼっこしないのは日差しに対して失礼にあたるというものだろう。

そういうわけであくびを噛み殺しながらツァイトが目を閉じ、体をまるめていると、小さな足音が近づいてくるのに気付く。

子供の足音だ。

最近、子供が近づいてくることが多い。

少し前に、子供が導力バスに轢かれそうになるという事故



があった。
　実際は轢かれはしなかったものの、柵を突き破って落ちそうになったバスのバンパーに子供が一人引っかかってしまい、そのままでは危うく地面に落ちてしまいそうになるという事故だ。
　その時に助けた縁か、やたらと子供たちはツァイトに触れたがる。
　ツァイトも強い者にあやかりたい気持ちはわからなくもないので、年長者の余裕もあり、こういった自分に触れたがる子供には寛大に対応することにしているのだ。
　なので、目を閉じて近寄ってくる、小さな、けれど元気のいい足音を待つ。
　足音に先んじて聞こえるのは、
「ツァイト～！」
　元気のいい、男の子の声。
　ツァイトは目を開けた。
　そこには、緑の帽子をかぶったわんぱくそうな男の子と、薄いブラウンの髪の大人しそうな男の子がいた。
「ツァイト！　すっげ～、相変わらずカッコイイなあ！　ほら、アンリも早く！」
「リュウ……ちょっと待ってよ～……早いってば～……」
　わんぱくそうな方がリュウ。
　大人しそうな方がアンリ。
　この二人には、ツァイトも見覚えがあった。
　件の事故で助けた男の子がリュウで、そのそばにいたのがアンリなのだ。
「ツァイト～、こっち向いてくれよ～！」
　なんだ、と顔を向ければリュウは嬉しそうに体をばたばたさせる。
「うおお、牙でっけえ～！」
　興奮しきりの様子である。
　大きな牙や爪は強さの象徴だ。子供とはいえリュウも男。きっと強さへの憧れがあるのだろう、とツァイトは判断する。
「ほらアンリ、オマエも牙見せてもらえよ～！　すげえぞ！」
「……う、うん」
　とぼとぼとこちらに近寄ってくるアンリ。
　すぐそばに来ても、どこか上の空という様子で、支援課ビルの方向をながめている。
　そうしてしきりにため息をつく。
　なにか不安ごとでもあるのだろうかとツァイトは思ったが、人間相手に問いかけるわけにもいかない。
　あくまで自分は見守る者なのだ。
　人は困難を自分の力で乗り越えることで成長していく。
　だから自分がことさら気にしてやるのはアンリの成長の妨げになるだろう。それに今はひなたぼっこで忙しいのだし……そう考えてツァイトはまぶたを閉じる。
　けれど、
「なあアンリ～？　気になるなら見に行けばいいだろ？　オレもいっしょに行ってやるからさ～」
　リュウの言葉に、閉じたまぶたを開ける。
　やはりなにかアンリには心配事があるらしい。
　手を貸すつもりはないが、知っておくぐらいは悪いことではないだろうと思ったツァイトは、話に耳をかたむけることにする。
　リュウからかけられた声に、アンリは明らかに沈んだ顔をしていた。
「でも、前に入った時にアリオスさんからも怒られたし……」
　消極的な態度だった。
　どうやらどこか『入ってはいけない場所』にアンリは用事があるようだった。
　しかも、かつて入ったことで怒られたのだろう。気になる気持ちと怒られたことにより芽生えた『入ってはいけない』という気持ちがせめぎあっている様子。
「子供だけで入ったからだろ～？　……そうだ！　警察の兄ちゃんたちに頼んだらいいんじゃないか!?　まあまあ頼りになるし！」
「そ、それだけはダメだよ！」
　これまでのおどおどした様子からは想像もつかない剣幕で反論するアンリ。
「う、う～ん、そっか～……遊撃士は忙しそうだしな～……じゃあどうすんだよ？」
　リュウも思わず引き下がる。
　……アンリの行きたい場所は、子供だけでは入れないけれど、特務支援課の助力は得られない場所らしい。
　ツァイトは少しだけ興味が出てくる。
　大人ならばわけのないことでも、子供にとっては大冒険、ということが世の中にはままある。
　それをこの子供たちがどう乗り越え、どう成長していくのか……。
　ツァイトはすっかり傍観者の気分で見守ることにする。
　――油断していたのだ。
「そうだ！　ツァイトに頼めばいいんだ！」
　大声で言うのはリュウだった。
　アンリもはっとした顔になってこちらを見ている。
　……集まる視線に嫌な予感。
　近寄ってくるアンリに、がっしりと前足をつかまれる。
「ツァイト、お願いだよ！　いっしょにジオフロントに行ってくれないかな!?」

ツァイトと子供たちの軌跡１

予想と違う展開だった。

子供たちが知恵と勇気を振り絞り成長していくものだと思いきや、なぜか助力を請われている状況。

ツァイトはやや困惑しながらアンリを見る。

その表情は必死だった。

「実は、中央広場の鐘のところに、えっと……『あるもの』を落としちゃったんだ！　それで取りに行きたいんだけど、僕たちだけじゃ鐘の下にあるジオフロントには入れないし……だからお願いだよツァイト！　僕に力を貸して！」

「……ウルゥ」

話を聞くに、ジオフロントという場所は子供だけで入るには危険なのだろう。

しかしあまり簡単に力を貸すのもどうかとは思う。なにより見守るべき対象は市に住まう住人ではなく特務支援課の若者たちなのだし……。

そんなツァイトの思いとは裏腹に。

「よし、じゃあ今すぐ行こう！」

リュウが元気よく言って。

「あ、でも、リュウ！　大聖堂に行かなくていいの？　日曜学校、もう始まっちゃってるよ〜！」

アンリがはっとしたように言って。

「あ、やべっ！　じゃあツァイト、えっと、日曜学校終わったらジオフロント入り口に集合な！　また鐘のとこから入ったら警察の兄ちゃんたちに見つかりそうだし！」

「よろしくねツァイト！　あ、特務支援課の人には絶対に、絶対に、ぜ〜ったいに、秘密だからね！」

走り去っていく子供たち。

取り残されるツァイト。

ツァイトは考える。もし自分が行かなければどうなるだろうか？

それでもあの二人は待つだろう。ひょっとしたら、待ちきれずに入るかもしれない。ジオフロントがどんな場所かは知らないが、子供だけで入ってはいけない場所だろう。危険かもしれない。

一方的な約束とは言え、放っておくわけにもいかなさそうだった。

「……ウォン」

ツァイトはため息でもつくように一声漏らして、まぶたを閉じた。

日曜学校とやらが終わったら忙しくなりそうなのだ。

今のうちに少しでも、日差しをあびて休んでおこう……。

「そういえば、教会前のバス亭ですれ違ったリュウたちの様子、おかしくなかったか？」

支援課ビル。

職務の合間に休憩をとっていたロイドたちの雑談が不意にリュウたちの話題になった。

四人がお茶を飲んでいるテーブルのそばで、丸まって休んでいたツァイトは、目を開けて様子をうかがう。

ロイドという青年は、普段のんびりしているように見えるが、ここぞという時に妙な鋭さを見せるのだ。

……アンリに言われた『絶対に秘密だからね』という言葉を思い出す。

ここは話題の矛先がこちらに向く前に、さっさと約束の場所へ向かっておいた方がいいだろう――そう考えてツァイトはこっそり支援課ビルを出ようとするのだが。

「……ツァイト、どこへ行くんですか？」

ティオがこちらの様子に気付き、とがめるような視線を向けてくる。

そうだ。ロイドも鋭いが、ティオも鋭いところがあるのだった。

神狼であるこちらの意思を言葉に頼らず読み取るという意味で、その鋭さはロイド以上だろうか。

「グルルルル……」

ただの散歩だ、と伝える。

しかしティオはジト目でこちらを見たままだ。

しかも、ティオの言葉で特務支援課全員の目がこちらを見ている。

「そういえば最近、ツァイトはリュウたちと一緒にいることが多いよな。リュウたちの話題になった途端に動き出したし……ひょっとして、なにか関係でもあるのか？」

ロイドの推理が神がかりすぎていた。

……彼らに目をつけた理由の一つでもあるのだが、いざこちらが秘密を抱えている際にその推理力を向けられると厄介である。

「あ〜……、たしかになぁ。助けてからやけに懐かれてるよなぁ、ツァイト」

ランディまでロイドの発言に乗っかった。

黙って考え込む四人。

どうするべきかツァイトも考える。

ここでこっそり出て行くのは、秘密を抱えていると白状しているようなものだ。

一方的とは言え約束は約束。アンリは特務支援課の面々にジオフロントへ行くと知られるのをやけに嫌がっていた様子だった。

それをこちらの落ち度で発覚させてしまうのは、少なから

ツァイトと子供たちの軌跡１



ずアンリに面目が立たない。

ならばここは一つ、言いくるめてみよう。

「グルルル……ウォン」

「ティオ、ツァイトはなんて？」

「『別になにもない。ただの散歩だ』だそうです。……あやしいです」

「ツァイト」

真剣な顔でロイドがこちらを見ている。

「リュウたちが何かまた危ないことをしようとしてるんなら、素直に教えてほしいんだ」

「グルルル……」

「『そこまで怪しむほどおかしな態度だったのか』だそうです」

「怪しかったかって、なあ？」

ランディが、これまで黙っていたエリィに目配せする。

エリィは困ったようにため息をつく。

「ええ……。なんだか、私を見たとたんに逃げ出したような……どうしたのかしら？」

やや傷ついた様子のエリィ。

「俺らの知らないところでお嬢がこっぴどく叱った、とかか？」

「もう、そんなことしてないわよ！」

茶化すランディにやや怒ったようにエリィは言った。

そういえばアンリは『絶対に特務支援課は頼れない』というような様子だったことを思い出す。

ひょっとして特務支援課全体ではなく、エリィを避けているのだろうか？

しかし、どうして？

「……なにか知っているのですか、ツァイト？」

考え込む様子を見透かされる。

下手な弁解ではますます分が悪くなりそうだ。

「……ウォン」

焦っている様子は見せないように、けれどさっさと話題を切り上げて外に出ることにする。

「……あやしいです。あやしすぎです」

ティオが最後まで疑うような目を向けてくる。

しかし、とツァイトは思う。

自分だってアンリとリュウの目的すべてを知っているわけではないのだ。

彼らがなにを求め危険を冒そうとしているのか——

そばで見守り答えを知るのも、また一興かもしれない。

「ツァイト〜！　遅いぞ〜！」

ジオフロントと呼ばれている場所の入り口がわからなかったので、リュウとアンリのにおいをたどってその場所に来た。

そこは駅前にある階段を降りた場所。

立派な扉の前で、リュウとアンリはそわそわしながら待っていた。

階段を降りて二人の目の前に立てば、リュウは怒ったような、アンリはほっとしたような顔でツァイトを出迎えた。

「来てくれないかと思ったよ〜」

「アンリは心配性だな〜！　ツァイトは強くてカッコイイんだぞ？　約束破ったりなんかするもんか！」

「でも〜」

随分と頼られているようで、少しだけ誇らしい。

だが、頼りすぎは成長を阻害しかねない。……ついては来たがあくまでお目付役、彼らの小さな冒険にかかわりすぎないようにするべきだろう、とツァイトは自分の行動をある程度制限することにした。

「さて、行くか」

リュウがジオフロントの扉へ向き直る。

立派な扉だ。きっと施錠もされているだろう。……自分が力を貸せば破ることはできるだろうが、ツァイトはそこまで力を貸すつもりはなかった。

ならばこの二人はどのようにして、この最初の難関を乗り越えるのか？

ツァイトは期待しながら、扉へと一歩踏み出すリュウの背中を見守る。

そしてリュウの正面でかたく閉ざされていた扉は——

シュン、という音を立てて、あっけなく開いた。

「行こうぜ〜！」

駆けていくリュウ。

「待ってよ〜！」

置いて行かれまいと追従するアンリ。

ツァイトはあっけなく開いた扉と走る二人の背中を見ながら思う。

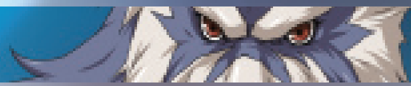
あまり力を貸すつもりもないのだが。

……これは、本当に自分の助力がいるのだろうか？

ジオフロントの内部は広いのにどことなく圧迫感のある不思議な空間だった。

充分な高さの天井。床や扉の一部が放つ青い光に照らされて、内部の様子ははっきりとは言えないが、進むには不都合ない程度には見える。

つぎはぎだらけの床に、細長いものが這い回る壁や天井。



まるで人工の鍾乳洞だ。壁中へはしっているパイプやダクトからは、魔獣のものだろう、動物の鳴き声が、どこからともなく反響して不気味な気配をかもしだしている。

ジオフロントに入ると、まずは分かれ道があった。

真っ直ぐ前へ進む扉と、右へ進む扉。

分厚い円盤状の扉なので、先の様子をうかがい知ることはできない。

「リュウ、どっちに行く?」

青く光る床の上で、アンリはおどおどとリュウに問いかける。

しかしリュウは迷った様子もなく真っ直ぐ前へ。

「バッカだなあアンリは。前にアリオスさんに助けてもらった時に、こっちの扉から帰ってきただろ〜?」

「あ、そういえばそうだったね」

アンリも納得したように進む。

扉をくぐってその先へ。

すると、そこでは——

「ま、魔獣だ!」

小型の、頭部分を硬質化したトゲつきの皮膚で覆っているネズミのような魔獣が、ぴょんぴょんと跳ね回るように徘徊していた。

通路は広くもない一本道だ。あの魔獣に接近せずに通り抜けるのは無理だろう。

ツァイトはその魔獣を観察する。

見るに、強くはなさそうだ。自分が動けば退散させることは簡単だろう。

しかし。

「ど、どうするのさリュウ……? 僕たちじゃ、魔獣なんて倒せないよ?」

「静かに! 静かにするんだ!」

「叫ばないでよ!?」

「……だいじょうぶだ。こっそりと後ろを通れば、気付かない……はず」

そろりそろり、足音をひそめてリュウとアンリはこっそり魔獣へ近づいていく。

二人にならって、ツァイトも気配を消して通り抜けることに。

前を歩くリュウとアンリを見る。

緊張感のにじんだ真剣な表情。

ごくりと唾を飲み込み、無意識にだろう、手をつないでいる。

二人は一世一代の大勝負をいどむように魔獣へと接近していき、ついにその背後へ迫る。

魔獣はこちらには気付かず、ぴょんぴょんと跳ね回っている。

「……リュウ〜」

「だいじょうぶ、だいじょうぶだ。オレがついてる」

自分も恐怖に冷や汗を垂らしながら、リュウはアンリを安心させるように言った。

そして、ようやく、魔獣の背後を抜ける。

どっと緊張していた空気がゆるむような気配。

しかしまだ安心するには早い。

リュウとアンリもそのことを理解しているのだろう。顔を見合わせ真剣にうなずきあってから、先ほどまでより早い歩調で魔獣から遠ざかろうとして。

「うわわっ……!」

アンリが、床の継ぎ目の一つに足をひっかけた。

ビターン! という痛そうな音がジオフロント内部に反響する。

「アンリっ!?」

つないでいた手に引きずられそうになりながらも、リュウはどうにかふみとどまった。

けれど、今の音は魔獣の注意をひくには充分すぎた。

こちらに気付いた魔獣が、一目散にリュウとアンリを目指して駆けてくる。

仕方ない、手を貸すか——

そうツァイトは考えたけれど。

「き、来たっ! 来たよリュウ!?」

「おちつけ! おちついて、えっと、お、おちつけよ!?」

「リュウこそおちつきなよ! ど、どうしよう!?」

「そんなもの逃げるにきまってるだろ!」

引き上げるようにアンリを助け起こし、そのまま走って行くリュウたち。

ツァイトは手助けをやめて、迫る魔獣を警戒しながら二人のあとについていく。

先へ行くための扉は近い。

二人は走って走って、円盤状の分厚い扉を開けるのももどかしく、すべりこむように先へと到達した。

二人して足をひっかけ、仲良く転ぶ。

迫る魔獣の姿がすぐそこに見えて、二人がすくみあがる。

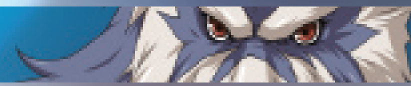
その一瞬のあと。

エリアを区切る扉がようやく閉じて、二人は安堵の息をついた。

ガン、ガン、という音がどこからともなく反響してくる。

おそらく、先ほどアンリたちを見つけた魔獣が、扉に体当たりでもしているのだろう。

リュウとアンリは恐怖にこわばったままの顔でお互いを見て。



「……あは」
「……へへっ」
　二人して、笑い出した。
　しばらく二人転んだまま、笑い声が続く。
　二人は目に涙すら浮かべるほどに笑い転げて、
「な、なぁんだ。魔獣ってもたいしたことないな！」
「もう、リュウはすぐ調子にのるんだから……僕は足が震えて動かないよ」
「なっさけないなぁアンリは」
　言いながら立ち上がるリュウ。
　その足もアンリ同様に震えていたけれど、それでもリュウは寝転んだままのアンリに手を差し出す。
「まだ終わってないんだ。こんなとこでぐずぐずしてられない。だろ？」
「うん」
　アンリが、リュウの手をとって立ち上がる。
　その様子を見てツァイトは思う。
　足が震えて、転んだ時に擦り傷まで作って、はっきり言って、二人は情けない姿をしている。
　だけれど、たしかに二人は一つの戦いに挑み、勝利したのだ。
　──手を出さないで良かった。

　ツァイトはそう考えながら、生まれたての動物のような足取りで先へ進む二人に、ついていく。
　しばらくは順調な道行きだった。
　ぶよぶよした、冷気を放つ青い魔獣の横をおそるおそる通り過ぎ、昆虫型の魔獣がいる部屋を一目散に駆け抜けた。
　……昆虫型魔獣のいる部屋には、二つの分かれ道があったが、アンリがどちらの道に行けばいいか覚えていたので、両方を当たってみるということはせずにすんだのだ。
　一つ一つ、脅威を超えていくにつれ、二人の結束がかたくなっているようにツァイトからは見えた。
　そして、先ほどネズミ型魔獣がいたような一本道に出る。
　そこでは、コウモリ型魔獣がぱたぱたと飛び回っていた。
「ここを抜ければ、鐘の下に出るんだよね、たしか」
　アンリがつぶやき、リュウはうなずく。
　距離と規模にしてしまえば、冒険とも呼べないようなお散歩。
　だけれどリュウとアンリにしてみれば、まさしく一命を賭した大冒険の終焉がすぐそこに迫っている。
　二人の緊張感の質が先ほどまでと変わっているのは当然の

ことだろう。
　目的の宝物を目の前にした高揚感と、最後の関門であるコウモリ型魔獣を目の前にした緊張感が子供たちの胸中でせめぎあっていることが、ツァイトからでも容易にわかる。
「こ、こんなの、前にオレをつかまえてた魔獣に比べたら大したことないな！」
「……でも、リュウ、その時は特務支援課のみなさんとか、アリオスさんに助けてもらったんじゃ」
「そういうのはいいんだよ！」
　リュウの反応に、アンリが笑う。
　最初は怯えるしかできなかった二人が、魔獣を前に笑う余裕まで手に入れた。
　ほんの短い道のり。逃げ続けてここまでたどり着いた二人。
　だけれどもたしかに二人は、成長している。
　だからこそ人間は面白い──
「行くぞ」
「うん」
　二人はかたく手をつないで、一緒に足を踏み出す。
　目指す先にはコウモリ型魔獣。……ネズミ型魔獣よりも動きは素早そうだ。昆虫型魔獣と同じぐらいの速さに見えるが、その部屋よりも、目指す出口への距離は遠い。
　それでも二人は勇気をもって進んで行く。

　だからツァイトも余計な手出しは無用と思い、気配を消して、それでも二人になにかあればすぐに助けになれるよう、ぴったりよりそうように二人の背後へ追従する。
　コウモリ型魔獣がぱたぱたと羽音を響かせる。
　リュウとアンリは、魔獣がこちらに背を向けた一瞬、お互いの顔を見てうなずいた。
　そして、一気に走り出す。
　こっそり近づいても気付かれるだろう、と二人は判断したのだ。
　手をつないで駆けていく。
　アンリがやや遅れる。
　リュウが、遅れたアンリを引っ張る。
　──コウモリ型魔獣が、二人に気付いた。
　キー！　と甲高い声で鳴きながらリュウとアンリに向け降下してくる魔獣。
「一気に走れ！」
「うん！」
　加速するリュウとアンリ。
　コウモリ型魔獣はその速さでどんどんこちらへ近づいてくる。
　あとほんの少し。
　ツァイトは迷いながらも、二人の熱意と努力を信じること

にする。

そして二人は扉へたどり着く。

開く円盤形の扉。

「今だ！」

リュウとアンリが駆け抜けていく。

ツァイトも同じように扉をくぐる。

プシュー、という音を立てて閉じていく円盤形の扉。

ドシン、という音が扉の向こうから聞こえて、それから、なんの物音もしなくなった。

「……や、やった～！」

アンリの嬉しそうな声。

リュウと抱き合うように、その場でへたりこむ。

……二人はようやく最後の関門を超えて、目的の場所へとたどりついたのだ。

充分に努力し、他者の手を借りずに結果を導き出した。

だから——

「な、なんか安心したら一気に寒くなってきたな……」

「うん、そうだね……」

抱き合いながら不思議そうな顔をするリュウとアンリ。

たしかに、室内の気温が急激に下がっているのは、ツァイトも気付いていた。

——そして、人間よりはるかに鋭敏な感覚をもつツァイトは、気温降下の原因にも、もちろん、気付いている。

「……おい、アンリ」

「え？　……あっ」

遅れてリュウとアンリも気付いたようだった。

この場所の気温が一気に降下した原因。

それは。

リュウとアンリ、それからツァイトを囲む、大量のぶよぶよした冷気を放つ魔獣。

「ど、どうしてこんな、大群で……」

「リュウ……」

立ち上がりながら周囲を見回す二人。

魔獣の群れは奥の扉からあふれ出してきているようだった。

その水分の多そうなぶよぶよした体を活かして、扉のわずかなスキマから染み出すように湧いてきている。

逃げ場はなく、戦って撃退できる強さは、二人にはない。

「くそう……あと少しなのに……」

「リュウ、あきらめよう。……もう、あきらめて、そこから逃げよう」

アンリが見つめる先には、地上へと続くであろうハシゴがあった。

「でも、アンリ、それじゃあ」

「……もういいよ」

「もう少しで落としたものを拾えるのに、どうしてあきらめるんだよ!?」

「だって、こんなに魔獣がいたら……」

ちらりとアンリが魔獣の群れの中を見る。

そこに見えたのは、綺麗なリボンでラッピングされた、少し不格好にも見える袋。

おそらくあれこそが、アンリが落としてしまった『あるもの』なのだろう。

「仕方ないよ。……あきらめたって、しょうがないんだよ」

言葉とは裏腹に、悔しそうに拳を握り締めて、涙すら浮かべながら、アンリは言う。

よほど大事なものなのだろうと、くわしい事情を知らなくてもわかる。

……ここまで、二人は充分によくやった。

ツァイトは思う。魔獣を前に逃げるしかないほど弱いのに、彼らは彼らの勇気と知恵だけでここまでたどり着いた。

——ならば、もう力を貸してもいいだろう。

だって、充分に努力してたどりついたのに、結果がこれではあまりにも報われない。

だからツァイトは四肢に力を込めて大きく吠えるべく魔獣の大群をにらみつけて——

「二人とも大丈夫か!?」

上から降ってきた誰かによって、魔獣が一掃される光景を見た。

トンファーをかまえたロイドだ。

ハシゴを使うのももどかしく、途中で飛び降りたのだろう。

押し寄せる魔獣の群れのただ中に立って、両手のトンファーで敵を薙ぎ払う。

「話はあとだ！　とにかく今は、ハシゴから逃げるんだ！」

ロイドに言われるが、アンリとリュウは突然のことにぽかんとしている。

その二人へ迫る魔獣。

しかし、

「あらよっとぉ！」

次に現れたのはランディだ。

武器を大きく振りかぶり地面に叩きつけて、魔獣たちを吹き飛ばす。

「こっちへ！　早く！」

ハシゴのそばから援護射撃をしながら、エリィがリュウた

ちに視線を向ける。

「リュウ！」

「お、おう！」

アンリとリュウが階段をのぼり、ハシゴのもとへ駆けていく。

その途中、ロイドとランディの攻撃から抜け出した魔獣が二人に迫る。

だけれども、

「……それっ」

つぶやくような声とともに、ハシゴの途中から杖を構えたティオがアーツを発動。

魔獣は炎に焼かれて塵になった。

「こっちです！」

ティオがアンリたちへ手を伸ばす。

最初にリュウに押されるようにアンリがティオの手をつかみ、ハシゴをのぼっていく。

「リュウもはやく〜！」

「わかってる！」

アンリに急かされるように、リュウもハシゴをのぼる。

それと入れ違いになるように、ティオがハシゴから飛び降りて、ツァイトのそばへと立った。

「……やっぱりなにかあったんですね。あとで説明してもらいますよ」

「……ウルルルル」

「それよりも今は、ツァイト、力を貸してください」

ティオに頼まれて、ツァイトは視線を魔獣の大群へと向けた。

そして、力を溜めて一気に吠える。

「ウルルルル……アォォォン！」

その咆哮はジオフロント中へと響き渡った。

魔獣の群れがずるずると這いずるように退散していく。

あとに残されたのは、魔獣の残した刺すような冷気。

それから、魔獣に踏みつぶされ、ボロボロになった、リボンでラッピングされた袋だけだった。

「どうしてこんな危険なことをしたんだ？」

支援課ビル――

食事をとるテーブルに座らされて、リュウとアンリ、それからツァイトは事情聴取を受けていた。

床に座って丸まりながら、ツァイトは卓上の様子をうかがう。

真剣な顔をして、リュウとアンリの正面に座っているロイド。

壁に背をあずけて笑みを含んだ顔をし場を見守っているのはランディ。

エリィはリュウとアンリの後ろに立って、二人の様子を見守っている。

……ところで、ティオが自分の隣に立ってこちらをジト目で見ているのは、また逃げ出すと思われているからだろうか、とツァイトは様子をうかがいつつ思う。

ともあれ、ロイドの問いかけに子供たちが答えるのをみんなで待つ状況。

しかしロイドの言葉に口をかたく結ぶリュウとアンリ。

ロイドはふぅ、とため息をついてから、なにかをテーブルの上に置く。

それはジオフロントでアンリが回収しようとしていた、ラッピングされた袋。

「あ、返せよ！　それはアンリんだぞ！」

ロイドにとびかかるようにリュウが立ち上がる。

「これを捜してたのか。……落とし物なら、警察に届けてくれれば――」

「ケーサツはアテになんねーだろ！」

「リュウ！」

アンリが叫ぶ。

リュウは、ばつが悪そうに唇をとがらせながら、座った。

「……事情を話してもらえるかな？」

優しく微笑みながら、ロイドがアンリを見る。

アンリはうつむいて、

「……実は、この間助けてもらったお礼をしたかったんです」

ぽつり、ぽつり、小さな声で語り出す。

「ダクトの中で、リュウともはぐれちゃって、心細かった時に助けてもらって、本当に安心したんです。だから……お礼がしたくって。でも、お金もないから手作りでどうにかしたんですけど、そのプレゼントを、鐘のところから落として、それで……」

「なるほど。俺らへのプレゼントだったから頼みにくかったってわけか」

ランディの言葉に、アンリは小さく「はい」と答えた。

事情を知ったロイドは小さくため息をつく。

「気持ちはありがたいけど、もう、こんな危険なことはしちゃダメだからな？　次からはきちんと俺たちに言ってくれよ？」

「……」

「返事」

「……はい。もうしません」

「……悪かったよ」

アンリの素直な答えと、リュウのそっぽを向いての答えにロイドは笑う。

そして、ジオフロントから回収したプレゼントを、アンリへと返した。

「え……？」

「これはまだ受け取れないよ。……君たちががんばって自分の力で取りに行ったんだから、せっかくだし、君の手から受け取りたいと思ってさ」

「……はい！」

アンリは嬉しそうに笑う。

そして、ボロボロになってしまったプレゼントをロイドのもとから自分の手に戻した。

それから――立ち上がって、エリィの正面へ行く。

「エリィさん」

「え、私？」

微笑んで様子を見守っていたエリィは、突然話題が自分へ向いたことにおどろいた様子だった。

アンリはプレゼントを差し出し、恥ずかしそうに顔をうつむけたまま。

「あの、ダクトのところで助けてくれて、本当にありがとうございました……！　あの時は本当に心細くて、まるで女神さまみたいに見えたんです！」

「え、えっと……照れるわね」

目を泳がせるエリィ。

その様子を見てランディが口笛を吹く。

「受け取ってやれよ女神さま。一人の男が命懸けで獲得したプレゼントだぜ？」

「もう、ランディったら、からかわないの！　……え、えっと、アンリくん、ありがとう。開けてみてもいいかしら？」

「はい！」

きらきらした目でエリィを見つめるアンリ。

その視線を受けつつ、慎重な動作で、ボロボロになった、けれど綺麗にラッピングされていたことがうかがえるプレゼント袋を開けるエリィ。

すると、中から出てきたのは――

「ブローチ、かしら？」

「はい。……その、お金がなくて、手作りですけど」

「ううん。ありがとう。とっても素敵なプレゼントね」

エリィはアンリの高さに目線をそろえながら、微笑んでアンリの手を握る。

顔を真っ赤にしてアンリは目を逸らした。

また、ランディが口笛を吹く。

「熱いねえ、ご両人！　いやあ妬けるぜ！」

「からかわないでってば、もう！」

騒ぐランディとエリィ。

照れたままのアンリ。

リュウもアンリの様子を見て、誇らしそうな、嬉しそうな様子。

「……なにはともあれ、一件落着、かな」

全員の様子を見回してロイドがつぶやいた。

――こうして、子供たちの小さな冒険は終わる。

ツァイトは思う。はからずもまた人間の面白い一面を見せてもらうことができた、と。

特務支援課だけではない。このクロスベル市にはこういう人材がたくさんいるのかも知れない。

これからも時に見守り、時に力を貸していこう――ツァイトはそう考えつつ。

「……でもツァイト、わたしにぐらい一言あってもよかったのではないですか」

いじけたようにティオがささやく言葉と、じっとりとした視線を子守歌代わりに、眠ってしまおうと大きくあくびをするのだった。

了

人生半キャラずらし

jdkバンドのドラマー・オカジがファルコムと音楽と人生について熱く語ります！



「The Azure Arbitrator／英雄伝説 碧の軌跡オリジナルサウンドトラック」

本日は12月21日に本番を控えたjdkバンドのリハーサル2日目。このコラムが公開される頃には、すでに本番を終え、ネタバレをしても大丈夫だと思うので、色々書いてしまおうと思う。

今回のライブのセットリストはかなりマニアックなファルコムファンの方にも、ご満足頂けるセットリストになったのではないかと思うところなのだが、楽しんでは頂けただろうか。

恒例のインストラッシュコーナーでは、個人的に待望のブランディッシュ～ダークレヴナント～のオープニング（原作98版で言うところのENDINGⅡ）をプレイしたり、なんとソーサリアンの消えた王様の杖やら、イースオリジンのオープニングなどなど、かなーりバラエティーに富んだ選曲となった。そしてボーカル曲では、初演奏の「I miss you」、そしてまさかの「風の伝説」などなど……語り始めたらキリが無い位の見所が満載のライブだったのである。

……いや、現時点では本番は明後日なんだが（笑）。

そして今回、ご紹介したい楽曲は、今ライブでもアンコールで演奏した「The Azure Arbitrator」。碧の軌跡のラスボス戦のBGMだ。スピード感に溢れたメロディックなメタルナンバーで、聴けば最終戦闘での苦い思い出（主に即死）が想起される事だろうと思う。いや、実際僕としても、あんなに苦労するラスボス戦は、ぽっぷるメイル88版のガイストレイス戦以来であった……。でも困難を乗り越えて見るエンディングだからこそ、大きな感動もあり、印象深いものだったりする。



碧の軌跡の最終戦闘もまさにそんな感じであった。

つい先日、無事アレンジを終えた碧の軌跡Evolution版「The Azure Arbitrator」は、かなーり猛烈にカッコ良いアレンジ版に仕上がったと思う。原曲の良さは残しつつ、主要楽器部隊は生演奏に差し替え、大幅にブラッシュアップ。もちろん、ドラムは僕が叩かせて頂いている。実はアレンジ版は7分を超える超大作となっているので、あのラスボス戦で何週聴いても飽きないという仕様だ（笑）。

そして、見所はなんと言っても、新たに追加したギターソロパート。なんと、寺前甲氏、宮崎大介氏、平松俊紀氏という3人の超絶ギタリストが共演し、ソロバトルを繰り広げるという激熱バージョンとなっているのだ。まさにギターざんまいとでも言うべきか。（この企画どうですか、ファルコムさん……！）

軌跡ファンにはもちろん、メタルファンの皆様にもぜひとも聴いて頂きたいと思うデキになったので、ご期待頂ければ幸いである。実際に碧の軌跡Evolutionが発売されるのは大分先の話ではあるが、僕も自分がアレンジした楽曲達が、実際のゲームの中でどういう風に響くのか、妄想しつつ期待して発売を待ちたいと思う。

さてさて、気がつけば師走後半。この連載も今回を持って本年は仕事納め。

ここまで連載が続いているのも、毎回読んでくださる皆様のお陰。本当に感謝感謝である。

今年も一年、本当にありがとうございました。

来年も、この連載を始め、ライブやイベントなど、皆様に楽しんでもらえるよう精進していきたいと思っているので、今後ともお付き合い頂ければ幸いであります。

来年も皆様にとってご多幸な一年でありますように。それでは良いお年を！

それではまた次回お会いしましょう！ では！



岡島俊治（Okaji）

1979年6月9日生まれ
ドラマー/パーカッショニスト/作曲、編曲家/プロデューサー
洗足学園短期大学器楽科打楽器専攻卒業。
2000年、ロックバンド『HeadPhonesPresident』のドラマーとしてデビュー。
2005年、同バンド脱退後はフリーミュージシャンとしての活動を開始。様々なアーティストのサポート、レコーディング、プロデュース等を行う。
2008年より『ファルコムjdkバンド』に参加。
主な共演歴：jdk BAND、Sixh.Opera、HeavensDust、野宮真貴、植村花菜、CORE OF SOUL、DENIAL、安藤禎央、清田愛未、中村幸代、一純悠人、momokomotion、越尾さくら…etc

「英雄伝説 碧の軌跡 オリジナルサウンドトラック」
ゲーム本編で使用された最新曲に加え、ボーナストラックとしてファルコムjdkバンドボーカル・小寺可南子が熱唱する主題歌「碧い軌跡」のフルバージョンも完全収録！
全58曲、CD2枚組でお届けするオリジナルサウンドトラック！
■価格　3,129円(税込)／ＤＬ版：　2,400円（税込）
■収録曲：全58曲
■商品ページ　ファルコムオンラインショップ
http://www.falcom.co.jp/mailorder/catalog/m064.html
■DL販売サイト：iTunes、AmazonMP3、mora
[iTunes配信情報]
ファルコム楽曲4,227曲をiTunesで世界111ヶ国に配信中。
(ファルコム楽曲はすべて高音質化、DRMフリーが適用されたiTunes Plusでの配信となります)

≪Falcom jdkバンドライブ特設サイトURL≫
http://www.falcom.co.jp/jdk/index.html

コテ放題

コテカナことjdkBANDボーカル小寺可南子が
ゲームと共に、好き放題な日々のことを描くコラム!!

第12回　苦節（?）1年。ついに！

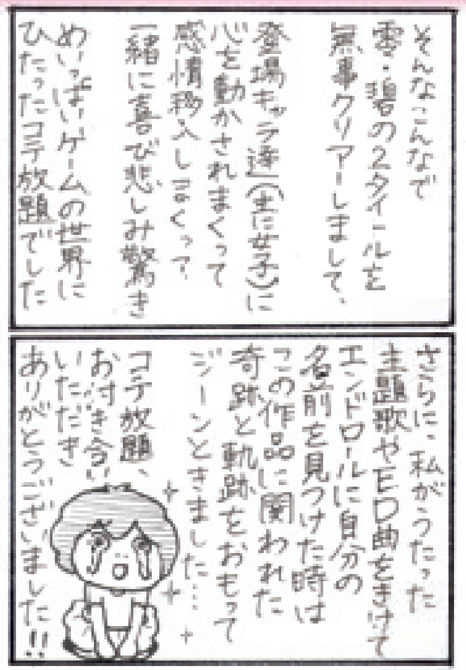
▶PROFILE



日本ファルコムのゲームソングを奏でる専属バンド"jdkBAND"のボーカル。webラジオ「ファルコムラジオ"めんどくさいです…でもがんばります"」では声優水橋かおりさんと共にパーソナリティをつとめる。その他CMソング、ジングルなど活動は多岐に渡る。
twitter @cana_ko_tera

まいどドウモみなさま！コテ放題「碧の軌跡編」最終回です！

零からさらに深まる仲間との絆や、謎だった部分の結末などなど盛り沢山な内容にPSPを持つ手が汗ばんで震えまくり！特務支援課&彼らのもとに集まるみんなが最高すぎて！後半になるにつれ何回泣かされたか!! 天然タラシなロイド君のくさいセリフも今となってはものすごく胸に響いてヤバイです！登場するキャラそれぞれがいろんな思いや信念を抱き、それが故に起こる複雑な人間同士の問題……。ゲームの中だけの話じゃなく、実際の世界の出来事と照らし合わせながらプレイしたりして、すごく考え深かいテーマが散りばめられた作品だなと感じました。軌跡シリーズ全制覇したい!!





コテさんお疲れ様！次は当然……ね？



2011年10月から好評配信中のWEBラジオ『ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります』の舞台裏をこっそりお届け♪

ティオのファルコムラジオめんどくさいです…でもがんばります
■配信日　毎週金曜日、公式HP、ランティスラジオ、ニコニコ動画にて更新。
■メインパーソナリティ　水橋かおり（『碧の軌跡』ティオ・プラトー役）　小寺可南子（『ファルコムjdkバンド』ボーカル）
■公式ホームページ　http://www.falcom-radio.com/

第110回-第112回 ｜ 平川大輔（『閃の軌跡』ルーファス・アルバレア役）

110-112回は、今年の10月13日にサンパール荒川にて行われたファルコムラジオの100回記念イベントの様子を2回にわたって放送した後、ラジオ上で反省会をやろうという特別編成で収録が行われた。イベントの詳細はアーカイブ放送をお聴きになっていただくとして、聴き所としてはもちろん、ゲストの平川大輔さんの美声、コテさんのミニライブ、しおりんの特製料理など、盛りだくさんの内容となっていることはお約束するぞ。112回の反省会では、実際にイベントに参加された方のお便りなどが紹介された。

▶第110回-第112回の舞台裏◀

第0回以来のイベントとなった100回記念イベントだったが、開場早々に多くの参加者がサンパール荒川に訪れ、開演までの間も熱気溢れる状態が続いていた。そんな中始まったイベントは、開演早々から熱いリアクションが返ってくるなど、大盛況のまま閉演を迎えた。

第113回 ｜ なし（お便りスペシャル）

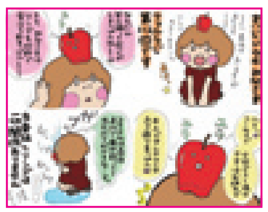
113回は今年最後の放送ということで、送られてきた多くのお便りを可能な限り読んでいこう！というコンセプトのお便りスペシャルとなった。jdkバンドライブ直前ということでそれに関したお便りや、『ファルコム学園』のアニメ化に関するトークなどが繰り広げられ、とうとう新久保だいすけ先生の出演も待ったなし!?　大好評の「ファルコムミュージックライブラリー」はお便りスペシャルでも行われ、『零えぼ』から「降水確率100%」、『白き魔女』から「ルード城」（イースvs空の軌跡ver）の２曲が紹介された。

▶第113回の舞台裏◀

今年の１月から始まった、その月で一番面白かった投稿を決める「MVL」だが、来年も行われることが決定しているぞ。コーナーを問わず、全ての投稿が対象になっているので、気軽に参加してみてはいかが？　パーソナリティーたちの直筆色紙をゲットできるチャンスだ！







今月のコテガキ

毎週更新とともに発表される、小寺さん直筆の「コテガキ」を少しだけご紹介！

英雄伝説 空の軌跡 the 3rd フリープレイ

星杯騎士ケビンが紡ぐ物語の続きとは…

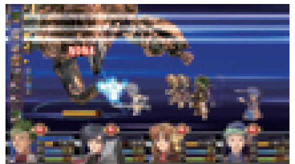
『英雄伝説 空の軌跡SC』から半年後の世界を星杯騎士・ケビンを主人公として描いた「軌跡」シリーズ通算３作目となる本作。そんな「the 3rd」がPlayStation®Plus会員登録をすれば、期間内に無料でダウンロード版を楽しめるラインナップに登場だ。『零の軌跡』『閃の軌跡』への布石ともなる外伝的作品をいま一度プレイしてみるのはいかが？　2014年1月中旬より配信開始予定。詳細は公式HPまで→（http://www.jp.playstation.com/psn/plus/）











英雄伝説 零の軌跡 Evolution DL版 スペシャルプライス

『零えぼ』のダウンロード版が期間限定で超お得に!

メインストーリーのフルボイス化、追加ムービーや支援要請などで話題となった『零えぼ』。2014年１月５日からスタートする『みんな集まれ！ファルコム学園』のＴＶアニメ化を記念して、なんとＤＬ版を特別価格でリリース決定！　2014年１月９日～2014年１月29日までの間、通常価格5040円（税込）がお求め安い2940円（税込）で配信される。数々の賞を受賞した名作ストーリーＲＰＧ、このチャンスは見逃せない！

THE LEGEND OF HEROES 零の軌跡 Evolution



▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！



閃の軌跡 B2シャワータペストリー
水を弾く特殊素材のタペストリー。Ⅶ組と一緒に露天風呂気分？



閃の軌跡 トールズ士官学院 技術棟オリジナル折りたたみコンテナ
士官学院の備品を管理する技術棟で使用されている道具箱をイメージ！

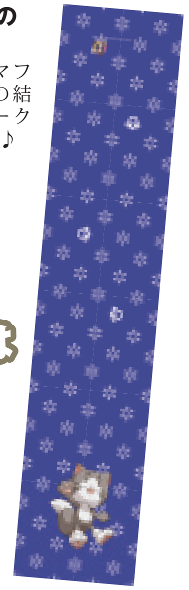
コミックマーケット85 工画堂ブースで新作グッズ販売!

今冬のコミックマーケットにも日本ファルコムの新作グッズが多数登場！　みっしぃと一緒にお出かけできるキュートなマフラーやおしゃれなカフェセット、収納に便利な折りたたみのコンテナなど普段使いにも最適だ。グッズは工画堂スタジオブースでの販売となるのでご注意を。2013年を締めくくるお気に入りのグッズをコミケで手に入れよう！　詳細は公式ＨＰまで→（http://www.falcom.com/event/winter.html）





Cafe' de みっしぃ
みっしぃカフェをイメージしたスペシャルなセット！



みっしぃのマフラー
あったかマフラーは雪の結晶とのマークがポイント♪

コミケで先行販売される「ファルコム冬グッズ」はキャラアニ.comでも12月29日より販売開始!!

※ページには冬コミで販売されない商品も掲載されていますので、ご注意ください。

Falcom FanArt Collection

数々の名作で多くのファンを生み出してきた日本ファルコム。
FFCでは、そんなファルコムを愛するイラストレーターの方々のイラストとコメントを毎月お届けします！



すだよし

ファルコム作品は魅力的なキャラクターばかりですね！ 『閃の軌跡』ではユーシスとマキアスがお気に入りです。戦闘中のこの２人専用のボイスに大爆笑でした。細かい！ 続編も楽しみにしております。

『英雄伝説 閃の軌跡』（2013）

革新派の帝都知事の息子・マキアスと貴族の名門の出であるユーシスは犬猿の仲。冷静沈着なユーシスは時おり激高するマキアスをなだめたりと喧嘩するほど仲が良い？コンビである。

『零えぼ』キャラアニ限定版でしか聴けない
あのドラマＣＤのシナリオが読めちゃう！

『みにどらまざんまい』シナリオ特別掲載!! 第3弾!

ドラマ版・偽ブランド業者の摘発
待ち合わせはベルガード門で



大好評『みにどらまざんまい』のドラマCDシナリオ掲載もいよいよ最終回。
今回はサブクエストで強烈なインパクトを残したあの人が大暴れする
『ドラマ版・偽ブランド業者の摘発』。ランディとミレイユがふたりきりで行う
あることとは？な『待ち合わせはベルガード門で』の２本だ。

■零の軌跡 Evolution
特典オリジナルドラマＣＤ
『みにどらまざんまい』

4．ドラマ版・偽ブランド業者の摘発

【登場人物】
ロイド・バニングス
エリィ・マクダエル
ティオ・プラトー
ランディ・オルランド
ノエル・シーカー
お婆さん（偽ブランド業者）
女性乗客1
女性乗客2
男性乗客

タングラム門・食堂（昼）

【SE】食堂の扉を開ける音。
【SE】食堂のにぎわい

ロイド　「まずは、ひとりひとりにどんな目的でクロスベルに行くのか、聞いてみよう」
エリィ　「わかったわ」
ランディ　「おっ、ロイド。あそこの美人、怪しくないか？」
ロイド　「え？」
ランディ　「オレの直感は、あの人が偽ブランド業者だと告げている！」
ロイド　「そうかな……？」
ランディ　「あのゆるいウェーブのかかった髪、壁際に立ちつくす憂いを帯びた顔。たまらないだろう？」
ロイド　「（戸惑い）ランディ？　なんか違うぞ？」
ランディ　「まずはあの女性から聞き込みだ、詳しく、事細かに！　体のすみからすみまで！」
ロイド　「最後のはどういう意味だ!?」

ひとり聞き込みというかナンパに向かうランディ。

【SE】走り去る足音

ランディ　「（遠くで）すみませーん、麗しいお姉さん。クロスベルに観光しに行くなら、オレがエスコートしましょうか～？」

女性乗客1「（遠くで）ごめんなさ～い、私、里帰りだから案内は必要ないの～」
ランディ「（遠くで）それは残念。あ、そこのツインテールのお嬢さ～ん。オレと一緒に、クロスベルで遊ばない？」
女性乗客2「（遠くで）え～？　お兄ちゃんと一緒だから、やめておく～」

ランディの様子を、少し離れたところから呆れて見ているロイド・エリィ・ティオ。

ロイド「すごい……ある意味、聞き込みに成功している」
ランディ「（遠くで）あ、そこのお姉さん。クロスベルへはどういった用事で～」
エリィ「ナンパには成功しないでしょうから、ランディに任せましょうか」
ティオ「そうですね」
ロイド「何気にひどいこと言うな、ふたりとも」

【SE】戻ってくる足音

× × ×

ランディ「ふいー。大体聞き終わったか？」
ロイド「いや、あと男性全員と、お婆さんに、聞いてない」
ランディ「おお、そうだったか！」
エリィ「どうしてそこを見事に外せるのかしら……」
ティオ「ランディさんの目には、美女フィルターがかかっているようですね」
エリィ「そんな目は、私の導力銃で撃ち抜いていいかしら？」
ティオ「かする程度でお願いします」
ロイド「さりげなく怖い会話をしないでくれ、ふたりとも。じゃあ次は、お婆さんに話を聞いてみようか、ランディ」
ランディ「（やる気ない）あー、ロイドよろしく」
ロイド「あからさまに、やる気をなくさないでくれ……ほら、いくぞ」

気を引き締めて、お婆さんに聞き込みを開始するロイド。

ロイド「あの、お婆さん」
お婆さん「（とってもお上品）おやおや、かわいらしい坊やねぇ」

ロイド「え？　あ、ありがとうございます」
お婆さん「何か御用かしら？」
ロイド「えっと……お婆さんはクロスベルの人？」
お婆さん「いえいえ、私は共和国人よ。（嬉しそう）息子夫婦が向こうにいるから、遊びに来たの。クロスベルに来るのは3年ぶりになるかしら」
エリィ「とっても嬉しそうですね、お婆さん」
お婆さん「おほほ……それはもう。なにせ、孫と会えますから。前に来た時に、孫とミシュラムのテーマパークで遊んだこと……まるで昨日のことのように思い出せるわ」

お婆さんの言動がひっかかるロイド。

ロイド「（考えこむ）……」
ランディ「（小声）おい、どうした。鼻の下が伸びてるぞ、ロイド」
ロイド「（小声）伸びてないから……！」
エリィ「次の人に話を聞きに行きましょうか」
ロイド「あ、ああ、そうだな」

聞き込みの会話でF・O。

ロイド「おじいさん、それ釣り道具ですよね？　クロスベルへは釣りをしに？」
男性乗客「……ああ、その通りだ。それがどうした？」
ロイド「え、えーっと……俺も釣りをやるので」
男性乗客「ふん、そうか」

□タングラム門・廊下（昼）

【SE】扉が閉まる音

聞き込みを終え、外へとやってくる特務支援課メンバー。

ノエル「あ、みなさん。首尾はどうでしたか？」
ロイド「ああ、なんとか全員に話が聞けたよ」
ノエル「お疲れ様です」
ティオ「聞き込みは終わりはしましたが、怪しい人はいませんでしたね」
ランディ「ああ、むしろ素敵な女性ばかりで……誰を食事に誘おうか迷うくらいだったな」

ランディの言葉の意味がわからず、首をかしげるノエル。

ノエル「……はい？」

ティオ　「永遠に迷っていてください」

ランディ　「ロイドは誰が好み……いや、誰が怪しいと思う？」

ロイド　「……その質問のされ方、すごく答えづらいんだけど……。引っかかることを言っていた人はいたよ」

ランディ　「おっ、さすがだな〜」

ロイド　「とにかくクロスベル市に着いてしまったらマークしきれなくなる。俺たちもバスに乗って、中で聞き込みのまとめに入ろう」

ノエル　「私はここまでしか手伝えませんが、みなさん、ご武運を！」

ロイド　「ありがとう、ノエル曹長」

□バス内（昼）

【SE】バスが発車する音

小声で聞き込みのまとめに入るロイド。

ロイド　「偽ブランド業者は、孫に会いに行くと言っていた、あの上品なお婆さんだ」

ティオ　「え……？」

ロイド　「しかもおそらくリーダー。部下には駅や空港のルートで偽ブランド品を運ばせ……自分は小さな荷物で、入国時のチェックが厳重でないタングラム門からクロスベル入りしようとしたんだろう」

ランディ　「ロイド……お前」

ロイド　「ん？」

ランディ　「あの人を犯人呼ばわりして声をかけようだなんて、熟女好きか！」

ロイド　「どうしてそうなるんだ!!　ちゃんと根拠があるんだって！」

エリィ　「（怒り）良かったわね、好みの人に出会えて」

ロイド　「ああっ、もう！　そろそろクロスベル市だ、バスを降りたら容疑者に声をかけるから、みんな、気を引き締めていてくれ！」

エリィ・ティオ・ランディ　「（複雑なため息）……はぁ」

ロイド　「本当に、引き締めておいてくれよ!?」

□クロスベル・バス停留所（昼）

【SE】バスが停車する音

【SE】人々がバスを降りる音

ロイド　「お婆さん、ちょっと待ってもらえますか？」

お婆さん　「あら、先ほどの坊やたちじゃないの、私になにかご用かしら？」

ロイド　「申し遅れましたが、俺たちはクロスベル警察・特務支援課に所属している者です。あなたに任意同行をお願いします」

お婆さん　「えっ、そんな……こんなか弱いお年寄りが何をしたというの？」

ロイド　「お婆さん、あなたはタングラム門の食堂で不思議なことを言いました」

お婆さん　「え？」

ロイド　「クロスベルに来たのは3年ぶり。そして……前に来た時、孫とミシュラムのテーマパークで遊んだと」

お婆さん　「ええっと……よく意味が……それの何が不思議なの？」

エリィ　「……そう、そういうことだったの。3年前には、ミシュラム保有地にテーマパークはできていないわ」

お婆さん　「（素）そ、そんなバカな！」

思わず素に戻ってしまうが、お上品な様子に慌てて戻すお婆さん。

お婆さん　「じゃなくて……ええっとそれは、その、そう、勘違いだわっ」

ロイド　「なるほど……勘違いですか。それじゃあ、おばあさんの息子夫婦とやらを呼んでいただきましょうか？」

お婆さん　「な!?」

ロイド　「……できませんよね、そんな人物は存在しないのだから」

ティオ　「その反応では、お孫さんもいないでしょう」

お婆さん　「く……」

ロイド　「あなたの勘違いは、3年ぶりなどではなく、定期的にクロスベルを訪れているからこそのものです。そう、さらに言えば、悪どい商売を行うために、クロスベルを訪れているからこその、ね」

お婆さん　「わ、私、そんなの知らないわ！　偽ブランド商品を売りつけるなんて、そんなひどいこと……」

ティオ　「墓穴を掘りましたね。お婆さん」

エリィ　「お婆さん、私たちは確かに偽ブランド業者を

追っていましたが……そのことは一度も言っていないはずですよ?」

お婆さん「あっ」

ランディ「古典的な手に引っかかっちまったな、バーさん。これが年貢の納め時ってヤツだぜ」

お婆さん「あ、あ、あ……」

ランディ「しかし、まさか本当にバーさんが犯人だったとは……好みだなんて疑って悪かったな、ロイド」

ロイド「だから初めっから言ってたじゃないかっ」

ティオ「あなたが知るはずのない情報を喋れた理由……警察本部の取り調べ室で聞かせていただきましょう」

本性を出すお婆さん。

お婆さん「だ……だ……だぁれが行くかね、このクソガキどもおおお!」

ロイド「ええ!?」

ティオ「正体を現しましたね」

お婆さん「人様をだまくらかすようなマネをしおってからにぃぃぃ! そんな真似ばかりしてたらね、いつかエイドス様から天罰が下るよッ!?」

ティオ「よくもまぁ、いけしゃあしゃあと。人を騙すような商売をしていたのは、あなたのほうでしょう?」

お婆さん「うるさいんだよ、チビガキ!」

ティオ「ち、チビガキ!?」

ランディ「おいおい往生際が悪いぜ、バーさん」

お婆さん「黙らっしゃい! このエロガッパ!」

ランディ「な、なぜガキの頃のあだ名を……!」

エリィ「そんなあだ名だったの!? とにかく、私たちと来てください、おばあさん!」

お婆さん「行かないって言ってるだろ。このウシヂチ!」

エリィ「(涙)ひ、ひどい! そこまで大きく、ないもの……!」

お婆さん「あーぁ、やだやだ! だから警察だの遊撃士だのは嫌いなんだ。自分が一番正しいとでも思ってるのかね、このバカチンが!」

ランディ「ダメだ……これはオレたちにゃ、手に負えねぜ」

ティオ「(まだショック)そうですね……ロイドさん、お願いします」

ランディ「紳士的なスマイルで、バーさんをメロメロにするんだ!」

ロイド「ええ!? 紳士的って、こ、こう……?」

【SE】キラキラ効果音

ロイド「(紳士的に)落ち着いてくださいご婦人。大人しく来ていただければ……」

お婆さん「だまらっしゃい、偽インテリ小僧!」

エリィ・ティオ・ランディ「(驚く)……っ!?」

ロイド「偽業者に偽とか言われた……立ち直れない」

ロイドよりも、絶望している他の三人。

エリィ「信じられない……」

ティオ「ロイドさんのフェミニスト・スマイルがきかないなんて……!」

ランディ「弟ブルジョアジーなロイドが!」

ティオ「どうしたんですかロイドさん、ポンポン痛いんですか!?」

ランディ「まさかその若さでもう枯れちまったのか!?」

エリィ「明日の天気が心配だわ……せっかくの創立記念祭なのに」

ロイド「みんな俺のことをなんだと思ってるんだ!!」

お婆さん「はんっ! とにかく、誰がついていくかね! このあたしを捕まえられるものなら……捕まえてみせなあああ!」

走り去っていくお婆さん。

【SE】走り去る音(超早い)

ティオ「あ、逃げた!」

エリィ「う、うそ……」

ランディ「すげぇあのバーさん! なんつースピードだ!」

ロイド「感心してないで、追いかけないと……!」

エリィ「許せない……」

ロイド「え?」

エリィ「あんな口の悪いおばあさんが、あの歳になっても若々しいなんて、許せないわ……!!」

おばあさんを追いかけるエリィ。

ロイド「エリィ! それ若者の台詞じゃないから!」

ティオ・ランディ「おう!」
だあぁ、もう! 俺たちも追うぞ!」

【SE】走り去る足音

□クロスベル市・東通り(昼)

【SE】走ってくる足音

やっとお婆さんを追いかけたエリィに追いつくメンバー。

ロイド「エリィ! お婆さんは!? って、えええ!?」

お婆さんが道路に倒れ、エリィがその傍に立っているのに驚くロイドたち。

ロイド「なんでお婆さんが倒れてるんだ!? エリィがやったのか!?」

ランディ「おいおい、女の嫉妬っていうのは、おそろしーな」

エリィ「ち、違うわ! 追いついた時には倒れてたのよっ」

ティオ「エリィさんの恨みが……お婆さんを転ばせたんでしょうか?」

エリィ「それは否定できないわ……」

ロイド「できないのか!? とにかく、お婆さんを!」

エリィ「ああっ、そうだったわ! 若さの秘訣を聞かないとっ」

ロイド「それ違う!」

お婆さん「く、くそう……まさかこんなところで転ぶだなんて」

ロイド「改めて、ご同行願いますよ、お婆さん」

お婆さん「ふん、こうなっちまったら、ついてってやるよ」

ロイド「やっとそう言ってくれましたか」

お婆さん「その代わり! お姫様だっこだね!」

ロイド「は……?」

お婆さん「ほら、レディが転んでるんだ、抱き上げないか、小僧!」

ロイド「ええ!?」

お婆さん「ほら早く! でないと警察なんぞ行かないよ!?」

ロイド「そ、そんな! こ、こうですか? (持ち上げる) ふんっ!」

お婆さんをお姫様だっこするロイド。お婆さんは満足そう。

お婆さん「ああ、それでいい。このまま、警察まで連れてっておくれ」

ロイド「ええ!? 警察まで……!?」

お婆さん「いやなのかい? それでも男か!? あたしを運べるなんて、光栄だろう!?」

ロイド「いや、それは別に……」

お婆さん「ああん!?」

ロイド「い、いえ! 光栄! 光栄です!!」

エリィ「(イラっ)む……」

ティオ「お婆さん、言葉とは裏腹に、にっこにこですね」

ランディ「バーさんはあれだな、ツンデレだったんだな。お姫様だっこしてやるあたり、意外とロイドもその気なんじゃないか?」

ティオ「やはり熟女趣味……」

エリィ「(怒り)どうやら、もうロイドだけで十分みたいね。私たちは帰りましょう」

ティオ「そうしましょうか」

ランディ「後は頼んだぜ、ロイド」

【SE】立ち去る足音(3人)

ロイド「え? ちょ、ちょっと! 待っ……!」

お婆さん「ほれ、とっととあたしを運ばないか! いつまでもレディを待たせるんじゃないよ!」

ロイド「わー! すみません!! あーもう……どうしてこうなったんだ!?」

ふたりっきりになったら、はにかみ始めるお婆さん。

お婆さん「……お前さんが望むんなら、このままどこかへさらってくれても……いいんだよ」

ロイド「え?」

お婆さん「(うっとり) ふたりで、愛の逃避行と行こうじゃないか」

ロイド「い、いやだあぁぁ!」

■零の軌跡 Evolution 特典オリジナルドラマCD『みにどらまざんまい』

6．ボクとアニキの7日間戦争

【登場人物】
ロイド・バニングス
エリィ・マクダエル
ティオ・プラトー
ランディ・オルランド
キーア
ガイ・バニングス

□特務支援課（昼）

タイトルコール

ロイド・ガイ「ボクとアニキの7日間戦争」

キーアN「ここは特務支援課っていう、ロイドたちのお仕事の……えーっと、拠点ってところだよ！ あ、ロイドがソファでお昼寝しちゃってる！ キーアが起こしてあげなくちゃ」

ガイ「いや、ここは俺に任せてくれ」

キーア「あれあれ？ お兄ちゃん、だ～れ？」

ソファでうたたねをしてしまっているロイド。

ロイド「(寝息)」

ガイ「おい、ロイド」

ロイド「う、うーん？」

ガイ「こんなところで寝ていると、風邪をひくぞ」

ロイド「え……!? 兄貴!?」

【SE】飛び起きる音

ガイ「やっと起きたか。疲れてるとはいえ、ちゃんとベッドで寝ろよ」

ロイド「ご、ごめん……」

ガイ「まったく、仕方がないな」

ロイドM「兄貴が、特務支援課にいる……？ そうか、これは夢か」

ふたりのところに、支援課メンバーがよってくる。

キーア「あー！ ロイドが起きた～！」

ロイド「ああ、おはよう、キーア」

ティオ「せっかくガイさんが来てるのにうたた寝なんて、もったいないことをしていましたね」

ロイド「あはは……ごめん」

エリィ「でもよかったわねロイド。お兄さんが生き返って！」

ロイド「え？ 生き返った!?」

ガイ「ああ、実はそうなんだ」

ロイドM「そういう設定の夢なのか……？」

ガイ「現世で正義のために戦えと、聖なる大樹の啓示を受けて、再び地上に舞い降りたんだ」

ロイド「はい？」

ガイ「俺にはこれから、聖戦に向かうという運命が待っている」

ロイド「どんな厨二設定だよ、兄貴！」

ランディ「まさか噂のガイ・バニングスに会えるとは……奇跡みたいなことが、起こるもんなんだな」

ロイド「いやいやいやいや！ いくら夢とはいえ、ありえないからっ」

ガイ「何を言ってるんだロイド。これは夢なんかじゃない。ちゃんと現実だ。これから俺はエイドスの導きのもと、世界を救う勇者になる」

ロイド「兄貴の発言が余計現実味なくしてるから！ きっと頬をつねったら、痛くないに決まって……」

【SE】頬つねる音

ロイド「あれ……？」

ロイドM「な、なんでだ！ 痛い……！」

ロイド「き、キーア！ お願いだ」

キーア「なーに？」

ロイド「俺の頬を思いきりひっぱたいてくれ！」

キーア「わかった～！ てい!!」

【SE】頬をひっぱたく音

ロイド「いった！ 痛い！ なぜだ！ 夢なのに！ ……エリィ！」

エリィ「な、何？」

ロイド「俺に関節技をきめてくれ！」

エリィ「今度は私……っ？　こ、こう？」

【SE】関節技をきめる音（ぎりぎり）

ロイド「い、イタタタ！　そんな、どうして……こんなこと、夢じゃなきゃあり得ないのにっ」

ガイ「いい加減現実を受け入れろ。俺が蘇ったのは、世界の理なんだからな」

ロイド「（ショック）そ、そんな……こんな厨二病っぽい兄貴が、現実だなんて」

ガイ「俺には、この世界でやり残したことがあるんだ……」

ロイド「え……？」

ガイ「大切な女に誓ったことを、やり遂げずに逝っちまうなんて、情けない……」

ロイドM「大切な女……それってセシル姉のことか？」

ガイ「俺は、ティオに一度もバーチャルゲームで勝ったことがない！」

ロイド「はぁ!?」

ティオ「ふふ。久々にやりますか、ガイさん」

ガイ「おう！　ゲー友だったお前に、いつか勝つと誓ったからな……！」

ロイド「えええええ!?」

ランディ「ゲーム友達……ふたりって、そういう関係だったのか」

エリィ「ロイドのお兄さんって……オタクだったのね」

ロイド「違うんだ！　兄貴はこんなんじゃない！　やっぱり何かの間違いだ～！」

ティオ「バーチャル空間を展開します……！」

【SE】アーツ発動の音

ロイド「え？　う、うわぁあ！」

□バーチャル空間・洞窟（昼）

【SE】シュン、という瞬間移動みたいな音

いきなり洞窟の中にいて、驚いているティオ・ガイ以外。

ロイド「え……な、なんだ？　ここは……洞窟？」

ティオ「移動はしていません。今皆さんに見えているのは、バーチャルシューティングゲーム、ゴースト・バスカレードのバトルフィールド映像です」

エリィ「えっと……つまり？」

ガイ「このゴーバスは、ユーザーの感覚に働きかけ、本当に戦っているように錯覚させるシステムを使ってるんだ。すごいだろ？」

ロイド「だ、だめだ……さっぱりわからない」

ティオ「まあ、ゲームと思わず、仮想モンスターとの実戦訓練だと思っていただければいいと思います」

ガイ「ちなみに、武器はライフルのみ使用可能だ。男は黙って、ライフルだろ！」

ロイド「兄貴からそんな言葉、聞いたことないよ」

ランディ「今のゲームって進んでるんだな」

ロイド「……適応能力高いな、ランディ」

エリィ「ねえ、ティオちゃん……さっきゴーストって言ってたけど……敵は幽霊なの？」

ティオ「はい、そうです」

エリィ「（おばけ苦手）……そ、そう」

キーア「とにかく、みんなで遊ぼうってことだよね～！」

ティオ「キーアはかしこいですね。その通りです」

ロイド「って、ちょっと待ってくれ！　なんでキーアまで巻き込んでるんだ！　これから戦うんだろう!?　危ないじゃないかっ」

ティオ「まぁ、ゲームですし。それにキーアだけ仲間外れにするのはどうかと思いまして……」

キーア「そうだよ、ロイド！」

ロイド「その前に、ティオと兄貴が決着つけるなら、ふたりだけでゲームをすれば良かったんじゃないか!?」

ガイ「このゲーム4人以上じゃないと、プレイできないんだよな」

ロイド「勝手すぎる!!」

ティオ「む……っ」

【SE】おどろおどろしい音

ガイ「お、敵のお出ましだ」

ティオ「それではガイさん。以前同様、1万ポイント先取したほうが勝ちということで」

ガイ「ああ……！」

ティオ「では、スタート！」

【SE】駆け出す音

ロイド　「え、ちょ、ちょっと？」

ガイ　「うおおおお！」

ティオ　「はあああ！」

【SE】銃撃戦の音

ガイ　「ふ……！　相変わらずいい腕だな、ティオ」

ティオ　「そちらこそ、天国に行ってらしたのに、腕はなまっていないようですね」

ガイとティオの激戦を、ぼーぜんと見ているロイド。

ロイド　「すごい……敵が攻撃する間も与えず、撃破してる」

ガイ　「ぼさっとしてるなロイド！　そっちにも敵がいったぞ！」

ロイド　「え!?」

【SE】おどろおどろしい音

キーア　「わわ、幽霊がいっぱいだ〜！」

ロイド　「危ないキーア！　この……っ！」

【SE】発砲の音

【SE】ゴーストが消滅する音（シュウウウ）

キーア　「わー、ありがとーロイド」

ロイド　「はは……どういたしまして」

【SE】おどろおどろしい音

ロイド　「く……慣れない武器でこの数は辛いな、二十はいる……！　エリィ、ランディ！　手を貸してくれ！」

端っこのほうで縮こまっているエリィとランディ。

エリィ　「ご、ごめんなさい……無理」

ロイド　「って……なんでふたりとも、そんなすみっこに座りこんでるんだ？」

ランディ　「わりーなロイド。オレはライフルじゃ戦えねーんだわ」

エリィ　「（震えて）おばけ怖い……おばけ怖い……おばけ怖い……」

ランディ　「お嬢もこんな感じだし、ロイドひとりで頼むー」

ロイド　「ええええ!?」

【SE】ゴーストが素早く通りすぎる音

ロイド　「う、うわっ！」

襲いかかってくるゴーストを、なんとかかわすロイド。次から次へとゴーストが迫ってくる。

キーア　「ロイドー！　どんどん増えるよー!!」

ロイド　「だあああああ！　もおおお！　こうなったらヤケだああ！」

【SE】銃連射の音（ダダダダッ）

困っているロイドにおかまいなしで、自分達のポイントを稼いでいるガイとティオ。

ガイ　「よっしゃ！　ポイント倍増アイテムゲット！」

ティオ　「むむっ、ピンチですっ」

ロイド　「どうでもいいから、早く決着つけてくれ〜」

×　×　×

なんとかゴーストの波が終わり、少し休憩できる時間ができる。

【SE】銃をリロードする音

ティオ　「攻撃がやみましたね」

ガイ　「ああ、第二波まで、少し休めそうだ」

ロイド　「はあ、はあ……」

キーア　「ロイド〜大丈夫？」

ロイド　「あ、ああ……なんとか」

ガイ　「疲れたか？」

ロイド　「さすがにね。兄貴は余裕だな……」

ガイ　「そりゃ年季が違うからな。お前だってやりこめば、俺レベルになるぞ！」

ロイド　「簡単に言ってくれる。俺が兄貴に追いつくとか、どれだけ頑張れば……」

ガイ　「なんだ、えらく弱気だな」

ロイド　「そりゃ……ゲームだけじゃなくて、色んなことがそうだからな」

ガイ　「はは、何言ってんだ」
ロイド　「笑いごとじゃないって」
ガイ　「そうか？　お前の仲間たちも、それ聞いたらおんなじように笑うと思うけどな」
ロイド　「え？」
ガイ　「キーアだっけ？」
キーア　「うん、キーアだよ」
ガイ　「ゴーストいっぱいで、怖いか？」
キーア　「うーん……ロイドがいるから、そうでもないよっ」
ガイ　「はは、そうか。だってよ、ロイド」
ロイド　「キーア……」
ガイ　「ティオだって、お前がキーアを守ってくれるってわかってるから、俺との対決に集中できるし……他のふたりも、そう思ってるから、お前に任せてるんだろ」
ロイド　「そう、かな？」
ガイ　「そうだろ。しばらく現世を離れてた俺がそう思うんだから。……お前は、よくやってるよ」
ロイド　「兄貴……」
ガイ　「その調子で、お前らしくこれからもやってけよ。仲間と一緒にな」
ロイド　「ああっ」
ガイ　「いい返事だ。それでこそ俺の」
【SE】連続発砲の音
ティオ　「スキル発動。迎撃します」
ガイ　「なっ！　ティオ!!　抜け駆けはずるいぞ！」
【SE】走り去る音
ロイド　「ちょ、兄貴!?　最後何を言いかけたんだ!?」
【SE】銃撃戦の音
ガイ　「おりゃあああ！」
ロイド　「って、もうゲームに夢中だしっ」
キーア　「ロイド、危ない！」
ロイド　「え？　あ……っ」
【SE】おどろおどろしい音
いつの間にかゴースト集団にかこまれているロイド。

ロイド　「しまった！　囲まれた!!　このっ！」
【SE】空砲の音・連続（カチカチ）
ロイド　「え!?　弾切れ!?」
キーア　「ロイド〜！」
【SE】おどろおどろしい音
ロイド　「わあ！　来るな！　来るな〜！　あ、兄貴！　兄貴！　このゲーム、弾の補充ってどうやるんだあああああ！」

□特務支援課（昼）
うなされているロイドの周りに集まっている、キーア・エリィ・ティオ。
ロイド　「うーん、うーん」
キーア　「やっぱり、ダメみたい〜」
ティオ　「キーアが思いっきり乗っかっても、ダメですか」
ランディがその様子をのぞきこんでくる。
ランディ　「みんなして何やってんだ？」
エリィ　「ああランディ。みんなでロイドを起こしてるんだけど、全然起きなくて……」
キーア　「ロイド〜こんなところで寝たら、風邪ひいちゃうよ！」
ロイド　「うーん……うーん」
ランディ　「なるほどな。キーアがロイドの上に乗ってるのは、起こそうとしてるのか」
ティオ　「はい。あと頬をつねったり、ひっぱたいたり、エリィさんに関節技決めてもらったり、氷を背中に入れたりしたんですが、全く効果なしです」
ランディ　「げ……」
ロイド　「うーん、うーん……」
エリィ　「一体どんな夢を見てるのかしら、こんなにうなされて、かわいそう」
ランディ　「……多分、うなされてるのは、お嬢たちのせいだと思うぞ？」
ロイド　「兄貴、兄貴ぃ……」

了

■零の軌跡Evolution特典オリジナルドラマCD『みにどらまざんまい』

5．待ち合わせはベルガード門で

【登場人物】
ランディ・オルランド
ミレイユ准尉
ロイド・バニングス
エリィ・マクダエル
ティオ・プラトー

□特務支援課（昼）

タイトルコール

ランディ・ミレイユ「待ち合わせはベルガード門で」

ティオN　『『黒の競売会』の潜入捜査を終えた私たちは、保護したキーアと一緒に穏やかな日々を過ごしていました。そんな中、ランディさんだけ、しょんぼりしてるみたいです……。やはり、ルバーチェ商会のガルシアさんとの戦いで、猟兵団にいたという過去を暴かれてしまったことを、気にしているのでしょうか？』

【SE】エニグマの着信音

少し元気がなく、着信に気付かないランディ。

ランディ「はぁ……」

ロイド　「ランディ」

ランディ「うーん」

ロイド　「おい、ランディ？」

ランディ「……っ！　あ、どうした？」

ロイド　「エニグマ、鳴ってるぞ？」

ランディ「おっと！　気付かなかった。わりーわりー」

【SE】エニグマを取る音

ランディ「はい、こちらランディ」

ランディの様子を心配するメンバーたち。

エリィ　「（小声）最近、たまにぼーっとしてるわね、ランディ」

ロイド　「（小声）そうだな……」

ランディ「なんだよ、ミレイユ。オレに声かけるなら、もっと色っぽく誘ってこいよ。……へいへい、そんな怒るなって。わかった、時間までにベルガード門に行ってやるよ」

【SE】エニグマを切る音

電話の内容が気になるメンバー。

ロイドは仕事的に気になり、女子メンバーは色恋沙汰の匂いを感じて気になっている。

ロイド　「ミレイユ准尉、なんだって？　支援要請か？」

冒頭より機嫌がよいランディ。

ランディ「ま、そんなようなもんだ。ただ、オレ様指名らしい。そんなわけで、ちょっくら出かけるぜ」

ロイド　「わかった。今日の仕事はほとんど終わったし、そっちに向かってくれ」

ランディ「悪いな。んじゃ、いってくる」

ロイド　「気をつけてな」

ランディ「（鼻歌）ふふんふーんっと♪」

【SE】立ち去っていく足音

ロイド　「ミレイユ准尉から個人的な依頼か、一体何があったんだろうな？」

エリィ　「怪しいわね」

ロイド　「え？　何が？」

エリィ　「個人的な依頼、電話が終わったあとのランディの上機嫌さ……怪しいわ」

ロイド　「そりゃ、元同僚から電話がかかってきたら、少しは機嫌が良くなるんじゃないか？」

ティオ　「甘いですよ、ロイドさん。ランディさんに特別な感情があるからに、決まっています」

ロイド　「ええ？」

出歯亀精神でウキウキしているエリィとティオ。

エリィ　「ランディがうまくいくように温かく見守るのは、仲間として当然よね、ロイド」

ティオ　「ここはついていかなければなりません」

ロイド「そ、そうかな?」

エリィ「というわけで、ランディを尾行しましょう!」

ティオ「おー!」

ロイド「……お、おー?」

□ベルガード門・外(夕)

約束通りベルガード門へとやってくるランディ。地面に荷物を置く。

【SE】荷物を置く音

ランディ「よっと。時間通りに到着、だな」

準備運動を始めるランディ。

ランディ「おいっちに、さんしっと」

×××

その様子を、影からこっそり見守るメンバー。

ティオ「なんとか、ばれずに尾行することができましたね」

ロイド「あれ……? おかしいな、ベルガード門の前に、警備の人間が誰もいない」

エリィ「本当だわ。それに、どうしてランディは準備運動なんてしてるのかしら……?」

×××

ランディ「さーて、ミレイユのヤツはどこにいるんだ?」

【SE】ミサイル発射の音

危険を察知して、その場から飛んで避難するランディ。

ランディ「……っ!? はっ!!」

【SE】爆発の音

×××

エリィ「え!? ミサイル!?」

ロイド「(心配して)ランディ……っ」

ティオ「出て行ってはダメですロイドさん! 見つかりますっ」

ロイド「でもっ」

ティオ「なんとか避けられたみたいですからっ」

×××

【SE】着地の音

ランディ「ふぃー……間一髪だったな。しょっぱなからこれかよ」

ベルガード門の最上階から、高らかな笑い声をあげるミレイユ。

ミレイユ「(OFF)おーほほほほほっ」

×××

ティオ「っ!? これは、ミレイユさんの声っ、一体どこから!?」

エリィ「……門の上よ!」

×××

ランディ「よお、ミレイユ。約束通り来てやったぜ」

ミレイユ「逃げずに来たことを褒めてあげるわ!」

ランディ「オレは女からの呼び出しを断ったことがねーんだよ」

ミレイユ「ふん、余裕じゃない。そんな口を叩けるのは今のうちだわ! 屋上までトラップの嵐よ! それを乗り越えて、私のもとへやってきなさい!」

ランディ「女に来いと言われて、引き返すわけにはいかねえな。行くぞ!」

【SE】走り出す足音

ぽかんとするメンバー。

ロイド「……ミレイユ准尉、なんかキャラが違う」

ティオ「これが、おふたりの交際の仕方なんでしょうか? 女性が高いヒールで男性を踏むのと同じような……」

ロイド「いや、違うと思うけど……なあ、この後俺たちはどうすればいいんだ?」

エリィ「もちろん、追いかけるわよ! きっとランディが屋上に辿り着いた時に、ふたりの本格的な愛

の時間が始まるに決まってるわ！」

ロイド「そ、そうかぁ？」

【SE】走り出す足音

□ベルガード門・内部の階段（夕）

【SE】階段を上っている音

【SE】矢が飛んでくる音

ランディ「おらあああ！」

【SE】矢をスタンハルバードで撃ち落とす音

門内放送で、ランディを挑発しているミレイユ。

ミレイユ「（拡声器）ちょっと、警備隊時代より足が遅くなったんじゃない？　いつまで私を待たせるのよ」

ランディ「足の速さは神狼（しんろう）並みと言われたオレを舐めるなよ！　遅いのはトラップのせいだトラップの！」

ミレイユ「（拡声器）ま、そういうことにしておいてあげるわ。あ、そうだわ、階段を上りきったらあなたの勝利を認めてあげるわ！」

ランディ「まったく、無茶言うぜ！」

ミレイユ「行くわよっ」

ランディ「……くっ」

さすがに助太刀せずにいられなくなり、飛び出していくロイドたち。

ロイド「待ってくれ！」

ミレイユ「え……⁉」

【SE】駆け寄る足音

ロイド「今すぐ攻撃をやめてくれ！」

ランディ「ロイド⁉　それに、お嬢とティオすけもついてきたのか⁉」

ロイド「悪いランディ、心配で……！　ミレイユ准尉、なぜランディにこんな仕打ちをするのか知らないが、さすがに戦車はやりすぎだ！」

エリィ「そうよ！　愛を確かめあうのは大切だけれど、死んでしまっては元も子もないわっ！」

ティオ「このままではツンデレではなく、ツンツンに……」

【SE】岩が2・3個落ちてくる音

ランディ「うおっ⁉」

ミレイユ「（拡声器）トラップも2倍になってるから、せいぜい気合いを入れなさい」

ランディ「マジだな、ミレイユ！　ここで引き下がったら男がすたるぜ……！」

【SE】駆け出す音

ランディ「うおおおお！」

なんとか後をついていっているロイドたち。

ロイド「さすがだ、ランディ。トラップを次から次へと突破してる」

エリィ「愛の力ね」

ティオ「ミレイユさんも、ランディさんの愛を確かめたくてこんなことをしてるんですね」

ロイド「……ふたりとも、どうしてもミレイユ准尉とランディをくっつけたいんだな」

□ベルガード門・屋上（夕）

屋上へと辿りつくランディ。

【SE】屋上の扉を開ける音

ランディ「はぁ、はぁ……やっとてっぺんかよ」

ミレイユ「よくここまでたどり着いたわ、ランディ」

ランディ「ああ、どうやら、これでオレの勝利だな」

ミレイユ「それはどうかしらね？」

ランディ「ん……⁉」

【SE】戦車の音

ランディ「おいおい……こいつは、穏やかじゃねーな」

ミレイユ「ベルガード門一の火力と動力を持つ、最新型の戦車、ベルガード・スペシャルよ！」

ランディ「うわ……だっせぇ名前」

ミレイユ「お、お黙りなさい！　隊員が勝手に呼んでるのよ！　とにかく、これの攻撃に耐えきったら、

なってしまいますっ」

ロイド　「まだ言うのか、ふたりとも……！」

ミレイユ　「あの……？」

ロイド　「とにかく、ふたりに何かいざこざがあったなら、話し合いでの解決してみないか⁉」

ランディ　「ロイド……何言ってんだ？」

ロイド　「え？」

ミレイユ　「何か誤解をされているようですね。今私は、ランディの特訓に付き合っていたのですが……」

ロイド　「えええ⁉　だ、だって、口調が明らかに怒ってたっていうか」

ランディ　「ああ、こいつ特訓の時、なんでか女王口調になるんだよ」

ロイド　「う、うそだろ……」

ランディ　「そっか、はたから見てたら、怒ってるって思うよな」

ミレイユ　「そうでしたか……女王口調は演出で、怒っていたわけではありません」

ランディ　「こいつクソ真面目だからさ、演出も徹底してるんだよ」

ミレイユ　「う、うるさいわね！」

ロイド　「な、なるほど……どうやら、色々深読みしすぎたみたいだな」

ショックを受けているエリィとティオ。

エリィ　「そんな……本当にただの特訓だったなんて」

ティオ　「ずーん……」

ランディ　「ん？　どうしてお嬢とティオすけは、こんなにがっかりしてるんだ？」

ロイド　「気にしないでくれ……」

ランディ　「そうか？　オレはこれから、こいつと飯食おうって約束なんだけど、お前らもくる？」

ロイド　「そうさせてもらおうかな？　できれば、なんでこんな特訓をしてたのか、聞きたい（口塞がれる）もがっ！」

エリィ　「（小声）ロイド、シッ！（大声）私たち三人はもう帰るから！　ふたりで行ってくれていいわ！」

ランディ　「いいのか？　なんか、今ロイドのやつが」

ティオ　「（遮って）どうぞおふたりだけで！」

ランディ　「お、おお……わかった。じゃあ、行くかミレイユ」

ミレイユ　「うん。最後クリアできなかったから、ランディの奢りね」

ランディ　「へいへい……」

ミレイユ　「それでは支援課の皆さん、失礼します」

ランディ　「気をつけて帰れよ〜」

ロイド　「ああ」

【SE】歩き去る足音

ロイド　「しかし……ランディの特訓のためにベルガード門全域を使うって……すごいな」

エリィ　「きっとそれは、ミレイユさんがランディのことを……！」

ティオ　「愛ゆえに成せる所業……！」

ロイド　「いや、それもういいから……」

□ベルガード門・食堂（夕）

【SE】コップを置く音

ミレイユ　「あ〜……勿体ない」

ランディ　「（お酒を飲む）ん？　なんだよ」

ミレイユ　「あのトラップを全部突破できるなんて……その身体能力、警備隊にいればどれだけの戦力になるか……」

ランディ　「はは、一杯でもう酔ってんのか？」

ミレイユ　「本気で言ってるのっ」

ランディ　「警備隊に戻る気はねーよ」

ミレイユ　「……勿体ない……勿体ない勿体ない勿体ない」

ランディ　「（からかって）そんなこと言って、オレと一緒いたいだけだろ〜？」

ミレイユ　「な……っ！　ば、バカなこと言わないで！　私は警備隊のことを思って言ってるのっ」

ランディ　「じゃあこうやって、定期的に特訓だっつって呼び出すのはどういうわけだ？」

ミレイユ　「それは……その……！　あ、あなたのためにやってあげてるんだから！　変な解釈しないでくれる⁉」

ランディ　「（棒読み）はいはい、ありがとうございます」

ミレイユ　「もう……」

ランディ　「（感情こめて）……ありがとな、ミレイユ」

ミレイユ　「な、何よ、急にしおらしくなって」

ランディ　「今回のことは特に、感謝してるよ。お前のおかげで、もやもやしてたのが、すっきりした」

ミレイユ「……ランディ」

ランディ「そういや、お前が特訓に誘ってくる時って、ちょうど俺が憂さ晴らししたい時なんだよな」

ミレイユ「……そう？」

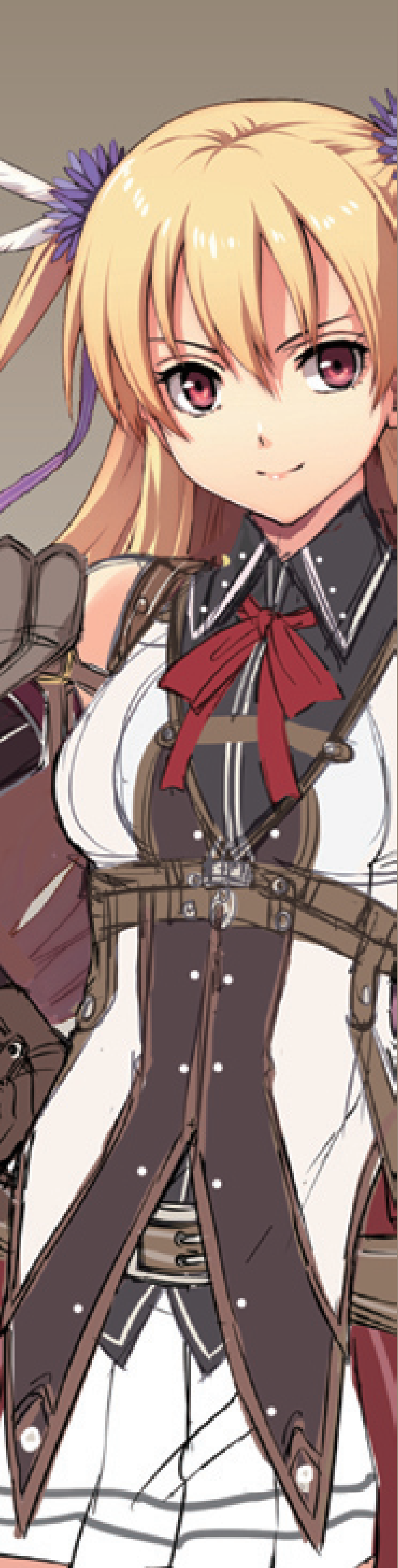
ランディ「なんでお前、そんなにタイミングいいんだ？」

ミレイユ「それは……。（小声）……あなたのことなら、わかるわよ。ずっと見てきたから」

ランディ「ん？」

ミレイユ「なんでもないわよ、馬鹿ランディ」

了



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.35

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
ライティング	宮崎洋平
デザイン・DTP	さとうだいち
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社